

2018年12月3日

みずほディーラーズアイ (2018年12月号)

みずほ銀行

目次

米ドル相場	2	韓国ウォン相場	9
ユーロ相場	4	台湾ドル相場	10
英ポンド相場	6	香港ドル相場	11
豪ドル相場	7	中国人民元相場	12
カナダドル相場	8	シンガポールドル相場	13
		タイバーツ相場	14
		マレーシアリング相場	15
		インドネシアルピア相場	16
		フィリピンペソ相場	17
		インドルピー相場	18

* 見通しは各ディーラーのビューに基づきます。

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。

米ドル相場

予想レンジ: USD/JPY 111.00 ~ 115.00

国際為替部 為替営業第二チーム 坂本 真史

■ 先月の為替相場

先月のドル/円は総じて堅調な展開となった。

月初1日は113円台前半でオープン。発表された米10月ISM製造業景況指数が予想を下回り、112円台半ばまで下落。翌2日、発表された米10月雇用統計が予想を大幅に上回ったことを受けて、米金利上昇に連れて113円台を回復。トランプ大統領から「米国は貿易問題で中国と合意するだろう」とのコメントが出たこともサポート材料となり、113円台前半で越週した。

5日週は、113 円台前半でオープン。週央7日、米中間選挙の開票が進み、バージニア州下院選にて民主党候補が共和党現職を破って勝利と伝わり、米長期金利が低下すると112円台後半まで急落。しかし下院選で共和党が善戦しているとの報道から113円台後半まで急反発。結局、予想通り上下院で「ねじれ」が固まるとドル売り地合いとなつて113円割れ。翌8日にはFOMCで金融政策は据え置かれたものの、声明文では雇用と個人消費の判断が引き上げられたことを手がかりに114円台まで上昇。週末はポジション調整もあり、113円台後半まで下げて越週した。

12日週は、113円台後半でオープン。アジア株の上昇を手がかりに月高値114.21円をつけるも、欧州株が下落すると113円台後半まで下落。翌13日は中国副首相が米国と貿易について再び協議を開始するとの報道を受けて114円台前半まで反発。その後週後半はブレグジットを巡る報道に113円台を中心に上下した。但し、週末16日には英ポンドの上昇やFRB高官のハト派発言等を受けて112円台半ばまで下落し、112円台後半で越週した。

19日週は、112 円台後半でオープン。クラリダFRB 副議長によるハト派的な発言が意識されたことや、APECでの首脳宣言採択断念を受けて米中通商摩擦の激化に対する悲観的な見方が強まったことで、112 円台半ばまで下落。翌20 日には月安値となる112.30 円をつけた。ただ、米金利が反発したことや米株が下げ幅を縮小する動きから、112 円台後半まで回復。21日には「FRB が来春から利上げの打ち止めを検討」との観測報道などが重石とはなったものの113 円台で底堅く推移。週末23日は、原油相場や米株の下落が嫌気され112円台半ばまで下げた後、112円台後半で越週した。

26日週は、112円台後半でオープン。前週のブラックフライデーでの売上が好調だったことから年末商戦に向けた期待感から米株が上昇する動きに113円台後半まで上昇。28日に114円台まで上昇したものの、パウエルFRB議長が講演で金融政策引き締め慎重になっている姿勢を示すと113円台半ばまで急落。結局113円台前半で越週した。

■ 今月の見通し

今月のドル/円は上値の重い展開を予想する。

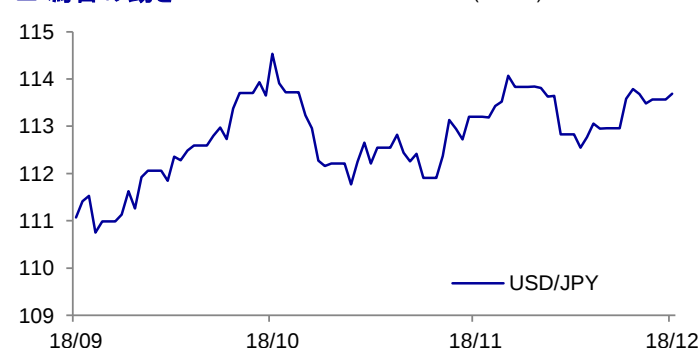
まずは米金融政策の今後の見通しがポイントになりそう。パウエルFRB議長は11月28日の講演で「米経済が底堅い成長を維持している」とし、「金利は依然として歴史的な水準に比べると低い」としたものの、「金利は(米経済を加速も減速もさせない)中立金利をわずかに下回る水準になった」と述べた。これまでもパウエル議長は今年9月に「金利が2020・2021年に中立水準上回る必要があるとの確信が持てない」と発言し、今年6月には「金利は来年以降、中立水準に近づく見通し」と発言するなど、無尽蔵に利上げをするつもりはないことは指摘してきた。しかし、足元の金利水準が中立金利というあるべき水準に極めて近いところであるとの認識を年の瀬迫るこのタイミングで示したことは、来年以降の利上げペースを占う上で重要だ。今年9月に示されたドットチャートでは、年内あと1回、2019年は3回の利上げが見込まれていた。今月19日に開催されるFOMCでは今年4回目の利上げが確実視されているが、同時に発表されるドットチャートで来年以降の利上げ見通しが下方修正されることは十分あり得る。米経済は言わずもがな、雇用は良好な状態が継続しているが、インフレの伸びが十分ではない。更にここに来て原油価格が大きく下落してきており、インフレの伸び鈍化圧力が強まりそう。ここは、利上げ回数が増えるよりは減るほうがイメージしやすい。

次に、米中貿易交渉の行方がポイントになりそう。11月に開催されたAPEC首脳会議で1993年に同会議が開催され始めて以降、初めて首脳宣言が採択されない事態となった。この要因は米中が互いを批判し、鋭く対立したためとされる。11月28日には米通商代表部が中国産車に最大40%まで関税を引き上げる方針を示している。一方で、米国自動車大手が米国内工場の生産停止・人員削減を発表した。これは鉄鋼・アルミニウムへの追加関税に伴う原材料費の高騰が一因とも報じられている。しかし、米中間選挙で「ねじれ」状態となり国内政治の政策実行力低下が警戒される中、少なくとも年内はトランプ政権が国外政治(外交)で強気を崩すとは考えにくい。APEC会合後のようなリスクオフムードから円高が進む可能性は十分考えられる。

その他、欧州に目を転じれば英国国内でのEU離脱合意形成、イタリア財政問題等、佳境を迎えつつある政治課題もある。ドル円は、ごく短期的にはリスクオンに転じ上昇する局面はあるかもしれないが、月を通してみれば上値重く弱含む展開を想定する。

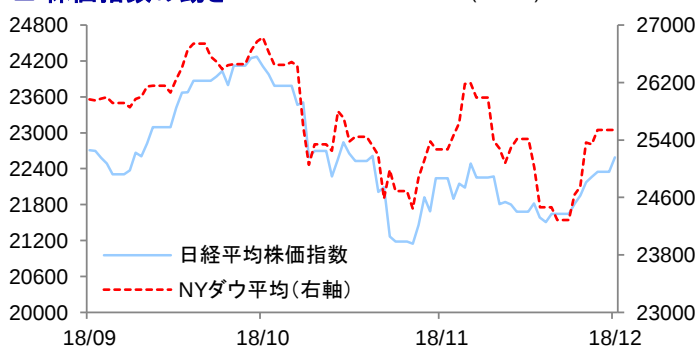
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	ISM製造業景況指数	10月	59.0	57.7	59.8
11/2	非農業部門雇用者数変化	10月	200K	250K	118K
11/2	失業率	10月	3.7%	3.7%	3.7%
11/2	平均時給(前年比)	10月	3.1%	3.1%	2.8%
11/6	ISM非製造業指数	10月	59.0	60.3	61.6
11/9	FOMC政策金利	-	2.00-2.25%	2.00-2.25%	2.00-2.25%
11/14	消費者物価指数(前月比)	10月	0.3%	0.3%	0.1%
11/15	小売売上高速報(前月比)	10月	0.5%	0.8%	0.1%
11/20	住宅着工件数	10月	1228K	1228K	1210K
11/21	耐久財受注(前月比)	10月	-2.6%	-4.4%	-0.1%

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ドル・ブル (2名、112.00～115.00、中心112.00～115.00)

光石	112.00 ～ 115.00	米国の利上げペースの鈍化観測が出ているものの、米国の金融政策は引き続き引き締め方向であることは不変。米中貿易摩擦やブレグジット等のリスク要因はあるものの、ドル、円共に逃避通貨となっており、基本的にはレンジ相場継続ながら底堅い展開となるものと見ている。
大熊	112.00 ～ 115.00	パウエルFRB議長がハト派な姿勢を見せ始め、利上げ打ち止め観測が懸念されるものの、12月の利上げは規定路線と思われる。米金利先高観の後退を好感して米株が底堅いこともサポート要因となり、ドル/円は堅調な展開を予想する。

■ドル・ベア (8名、111.00～115.00、中心111.00～114.50)

田内	111.00 ～ 114.00	世界経済の減速懸念や貿易摩擦の激化に加え、米利上げペース鈍化懸念を材料に、ドル円は伸び悩む展開を予想する。然し乍、米法人税減税に伴うリパトリの動きや年末超えに向けてのドル資金調達強化の動き等、年末の季節要因としてのドル需要増加により下値も限定的とみる。
加藤	112.00 ～ 114.00	米国の経済指標について、よくないものが現出し始めた。FANG株動向や住宅関連指数など景気関連指標に悪いものが見え始め、2019年に向け米国経済動向を占う月となりそう。
関	111.00 ～ 114.50	米国の中国の製造強国化に対する懸念は強く、対中制裁関税の手を緩めるとは思えない。貿易摩擦の長期化はグローバルな経済停滞と米国の景気拡大期の終焉を早め、FRBの正常化プロセスの終了を早めることに繋がり、ドル円の円高圧力が高まるものと予想。
藤巻	111.00 ～ 115.00	米中関係が改善すればドル円が上昇する可能性がある。但し、パウエル議長の一度の講演ではまだ判断がつかないものの、今後もハト派寄りな発言をし利上げ期待が低下するケースではドル売りとなり、ドル円は下落するリスクがあるのではないだろうか。
岡本	111.00 ～ 115.00	米国の対中関税引上げ・強化は見送られる可能性も浮上、センチメントが改善する可能性あり。しかし、米国以外の外部環境悪化を懸念する声をはじめ米利上げに懐疑的な意見も出始めている点を勘案すると、積極的なドル買いは続けづらいと史料される。
上野	111.00 ～ 114.50	FED高官のハト派傾斜は気になるところ。加えて、米経済は良好と言いきれるほど指標は強くない印象でドル円は下値リスクを警戒すべき局面だろう、しかし、来年度の利上げは十分に折り込まれていないため、方針転換が確認されても大きな値崩れはないと思う。
玉井	111.50 ～ 114.50	12月の利上げは実施される見込みではあるが、既に市場では折込済みであり影響は限定的になろう。FRB関係者によるハト派発言から来年の利上げペース減速が意識される中、貿易摩擦、原油価格下落等外部環境も良いと言えずドル円は下落を予想する。
森谷	111.00 ～ 114.50	今月FOMCにおける利上げは確実視されるものの、注目は来年以降の利上げペース。最近のFED高官の発言により、経済指標次第では利上げ打ち止め時期が近づくとと思惑も高まっている状況下、積極的なドル買いは入りづらくドル/円は上値の重い推移を予想する。

ユーロ相場

予想レンジ: EUR/USD 1.1100 ~ 1.1600
EUR/JPY 126.00 ~ 131.00

国際為替部 為替営業第二チーム 光石 晋祐

■ 先月の為替相場

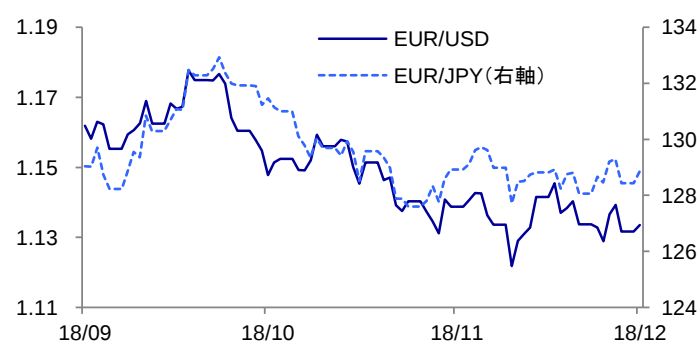
先月のユーロ/ドルは1.15台を示現したのち1.12台前半まで下落する荒い値動きとなった。月初1.1310近辺でオープンしたユーロ/ドルは、前日の「ブレグジット交渉を巡りラプ・英EU 離脱担当相が書簡で11月21 日までに合意する可能性を示した」との報道や、2日にトランプ米大統領が月末に開催されるG20に向けて米中貿易に関する合意草案の作成を指示したとの報道を受けて、リスク回避姿勢が緩んだことから1.1456 まで上昇。しかし、EU がイタリア予算案を巡り11 月21 日に制裁措置を発表するとの観測が台頭すると1.1346まで反転急落する展開となった。その後、5日にラプ・英EU 離脱担当相が辞任しないとの報が伝わりボンドが買われる動きにユーロも反発、7 日の米中間選挙結果を受けた全面的なドル売りに加え、独9 月鉱工業生産が予想を上回ったことからユーロ買いが優勢となるとユーロ/ドルは先月の高値となる1.1500、対円でも130.15 を示現。しかし、8日の米FOMCを受けた米国の利上げ継続観測からドル買い地合いに転じたことや、EU が予算を巡りイタリアとの対立激化を辞さない姿勢を示したことで一転ユーロ売りが加速し、13日に対ドルで約1 年5 か月ぶりの安値となる1.1216 まで、対円でも127.50まで急落する展開となった。その後も、イタリア政府が来年の財政赤字に関してEU 側の修正案に応じない姿勢を見せたことや、予想を下回る独7～9 月期GDP等のマイナス材料もあったものの、ユーロ/ドルは底堅く推移1.13 台半ばを回復。16日にクラリダ米FRB副議長が世界経済に減速の兆候が見られ、Fedは世界景気の見通しを考慮に入れるべき、とハト派よりの発言をすると急速にドル売り地合いとなりユーロ/ドルは20日にかけて1.1472まで大きく上昇する展開となった。同日にスペインのサンチェス首相が英EU 離脱協定の合意案について領土問題の条項が入っていないことに難色を示していることが伝わるとボンドの下落に連れ安となりユーロ/ドルは1.13台後半まで急落、更に23日に市場予想対比弱い内容となったユーロ圏11月サービス業PMIを受け1.13台前半までもう一段の下落を見た。その後、25日にEU加盟27か国の首脳によるブレグジットに係る条件の合意を受けてユーロは対ドルで1.13台後半まで反発したが、英国議会の通過を巡る不透明感が払拭できず、イタリア財政懸念も重石となる中、ユーロは対ドル、対円共に上値重く推移。28日にパウエル米FRB議長が金利は中立レンジをやや下回ると発言、以前より金融引き締めに慎重になっているとの見方が台頭し、全面的にドル売りの展開となったことを受け、ユーロは対ドルで1.1387 まで、対円も129.25まで上昇、そのまま129円近辺でのクローズとなった。

■ 今月の見通し

今月のユーロは対ドル、対円共に上値が重い展開を予想する。
今月の最大の焦点は引き続きブレグジットを巡る動向であろう。先月25日にEU加盟27か国の首脳が英国の離脱条件を承認したが、この承認はほぼ市場予想通りであり、市場参加者の最大の関心事は今月11日に予定されている英国議会での採決の行方。足許、英国議会の通過は極めて不透明な状況となっている一方EUサイドも条件交渉には応じない構えを見せており、英国議会での否決の際には合意なき離脱への懸念が急激に高まり、英ポンドのみならず当事者の一方となっているユーロも下落を免れないものと見ている。
ブレグジットと並び引き続きイタリアの2019年予算案を巡る問題もユーロの重石となろう。先月21日に欧州委員会はイタリアの19年予算案に対して過剰財政赤字は正手続き(EDP)に入ることが適正との判断を示し、今月上旬にもEU財務相理事会に正式に制裁手続きの着手について勧告する見通しとなっており、欧州委員会とイタリアの政治的な対立の深刻化に加え、制裁金賦課という前例のない事態に対する懸念が高まることが予想され、金融市場に混乱が広がる恐れがある。特にECBによる新規購入が今月中に停止されるイタリア債の利回り上昇は市場参加者のリスク回避姿勢につながることは必至で、現実のものとなればユーロ売りの圧力を高めることとなろう。
また、ドイツにおける与党CDUの党首選も気になるところ。現CDU党首であり独首相でもあるメルケル氏が不出馬となった与党CDUの党首選が12月7日に予定されており、目下のところ親メルケルの候補が選挙戦を優位に進めているとの報道がなされており、直近すぐに表面化するとは考えていないものの、メルケル氏の首相在任期間はあと3年残っており、首相と与党党首が異なるという異例の状態が長期にわたり続くことによるマイナス影響への懸念もユーロのネガティブ材料となるものと考えている。
ユーロはこうした内憂外患を抱えており、米国の利上げ打ち止め観測の台頭等対ドルでのユーロの下支え材料はあるものの、ユーロ自体を積極的に買い進めることは難しいものと予想している。

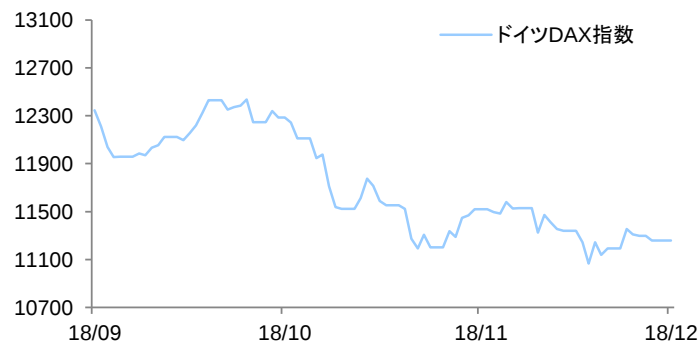
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/7	独鉱工業生産(前月比)	9月	0.0%	0.2%	-0.3%
11/13	独CPI(前年比/前月比)	10月	2.5%/0.2%	2.5%/0.2%	2.5%/0.2%
11/13	独ZEW指数(現状/期待)	11月	65.0/-26.0	58.2/-24.1	70.1/-24.7
11/14	ユーロ圏GDP(前年比/前期比)	3Q	1.7%/0.2%	1.7%/0.2%	1.7%/0.2%
11/14	独GDP(前年比/前期比)	3Q	1.2%/0.1%	1.1%/0.2%	2.3%/0.5%
11/16	ユーロ圏CPI(前年比/前月比)	10月	2.2%/0.2%	2.2%/0.2%	2.2%/0.5%
11/23	マークイットユーロ圏製造業PMI	11月	52.0	51.5	52.0
11/23	マークイットユーロ圏サービス業PMI	11月	53.6	53.1	53.7
11/26	IFO企業景況感指数	11月	102.3	102.0	102.8
11/29	独失業者数	11月	-10k	16k	-12k

カスタマーディーラーの相場観、注目点(本編の内容とは必ずしも一致しません)

■ ユーロ・ブル (2名、1.1200～1.1650、中心1.1200～1.1575)

藤巻	1.1200 ～ 1.1650	欧州については、イタリア、Brexit懸念など地政学リスクが継続していることや、指標も芳しくない。但し、ドルが下落するリスクが高まっており、投機筋のショートが溜まる中、そのアンワイドが入る場合は思いのほか上昇する可能性もあるのでは。
岡本	1.1200 ～ 1.1500	伊予算関連が重石となっているが、英EU離脱が議会で採択された場合対GBPでEURが買われる可能性が高い。ユーロ圏の指標の悪さも意識される中ではあるが、米利上げ期待剥落を受けたドル売りも想定され、安値圏で推移するユーロにはある程度買いが入るのではないかと。

■ ユーロ・ベア (8名、1.1000～1.1500、中心1.1050～1.1500)

田内	1.1000 ～ 1.1500	引き続きイタリア予算案を巡り根深い混迷に対する警戒感、イタリア政府と欧州委員会との確執が深刻化する可能性を勘案、ユーロは積極的に買い進め難い地合いを予想する。ドイツ連立政権のレームダック化、解散・総選挙の可能性の高まり等、ドイツ政局混迷も相場の重石として作用しよう。
加藤	1.1100 ～ 1.1500	ブレグジット協議実質先送りの影響でGBP/USDの買戻しが一時的に見られる可能性がある。その場合ユーロは対GBPでは軟調推移を予想するものの、対ドルではGBPに引きずられる形で若干買戻しが先行するかもしれない。
関	1.1000 ～ 1.1500	イタリア政府による新年度予算案の編成を巡っての欧州委員会との確執、ドイツでのメルケル独首相の党首辞任報道による混乱等、ユーロ圏は売り圧力に晒され易い状況。政治の混乱に加え、実体経済の減速感も見えてきており、ECBの正常化プロセスも後退となればユーロは引き続き上値重い動きを想定。
光石	1.1000 ～ 1.1500	ブレグジット、米国との間の自動車関税問題に加えイタリア財政問題、不安定なドイツの政局とユーロを取り巻く環境は内憂外患の様相。米国の利上げ期待が剥落しているというサポート要因はあるものの、積極的にユーロを買い進めることは難しいものと考えている。
上野	1.1100 ～ 1.1500	現状、過度な緊張感は薄まっている印象があるが、イタリア財政問題・英のEU離脱の動向については道半ばといったところ。12月中旬には離脱案に関する英議会採択など変局点となるイベントを控えているが、いずれにしろ、欧州域内の経済状況等に鑑み、ユーロを選好する環境にはなりにくいだろう。
玉井	1.1000 ～ 1.1500	イタリア予算案を巡るEUとの衝突は引き続きユーロの重石となる。また、Brexitは議会の承認が得られるかが焦点となるが、承認が得られたとしても英国経済の減速は避けられず、ポンドにつられてユーロも売られる可能性があると考える。
森谷	1.1100 ～ 1.1500	イタリア予算案、Brexit問題に加えてドイツ政治についても先行き不透明感が高い状況は変わらず。欧州圏内で発表されている経済指標についても、決して良好と言い切れる数字が続いているわけでもなく、ユーロを買い進めていく材料に乏しいと考えている。
大熊	1.1100 ～ 1.1500	欧州圏内の景気減速が顕著なことに加えて、Brexit問題やドイツのキリスト教民主同盟(CDU)の党首選が控えていること等、政治的な不透明要因が多い状況下ではユーロ買いの材料は見当たらず、軟調な推移を予想する。

英ポンド相場

予想レンジ: GBP/USD 1.2500 ~ 1.3500
GBP/JPY 140.00 ~ 150.00

欧州資金部 山本 泰平

■ 先月の為替相場

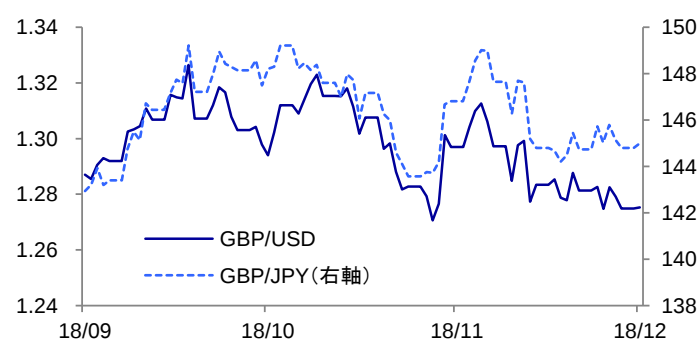
11月のポンド/ドルは、英EU離脱交渉を巡り、神経質に振られる展開。1.2765でオープンし、英金融規制がEU規制と概ね一致する限りにおいて、英金融機関は離脱後もEU市場にアクセスが可能との英紙報道を背景に、楽観ムードが広がる中、序盤は堅調に推移。1日は、英中銀が政策金利とインフレ報告書を発表し、政策金利が予想通り、0.75%に据え置かれたものの、中銀見通しでは、2019年終盤から景気が過熱する可能性を指摘し、より速いペースでの利上げを示唆。これを受け、ポンド/ドルは、2017年4月以来で最大となる日中上昇幅を記録。その後も、英離脱相が11月21日より前にEUと離脱条件で合意書を発表するとのヘッドラインから底堅く推移し、月中高値1.3176をつけた。しかし、メイ政権と閣外協力するDUPがEU離脱文書に不支持を表明し、英政府高官から金融サービス合意報道が否定されると下げに転じ、残留派のジョー・ジョンソン下院議員が運輸担当閣外相を辞任すると、政権運営が危ぶまれ1.2827まで下落した。14日の臨時閣議で、585ページに及ぶ離脱協定素案と政治宣言概略が承認されると、1.3072まで買い戻されるが、内容を吟味すると、アイルランド国境問題を巡って、国境管理厳格化を避けるためのバックストップ(防御策)が盛り込まれ、議会承認が困難な内容だったことから直ぐ反落。翌朝、ラームEU離脱担当相が辞任し、複数の離脱派や、野党・労働党やSNPからも、早々に不支持が表明されると、実数(1.2725)を更新した。その後も、信任投票の実施条件にあたる48人(所属議員315人の15%)の書簡を保守党内の強硬離脱派議員らが週末にも集めると報道され、上値重く推移したが、結局、48人に達すること無く越週すると、買い戻された。19日に発表された英住宅売却希望価格では、2011年以来初めて前年を下回る(前年同月比0.2%低下)結果となり、住宅市場の不振が示された。21日に欧州委員会が伊予算を拒否し、制裁手続きを取ることが報道されると、ポンドにも重石となり、1.27台を推移。22日には、英EU離脱の政治宣言草案が公表され、アイルランド国境を巡り、IT技術を駆使した新たな通関設備を構築することが盛り込まれたことから、バックストップが発動されるリスクが減り、1.2928まで急伸。しかし、ジブラルタル問題が解決できていないことから直ぐに下げた。結局、25日のEU首脳会議では、英EU離脱と将来の関係を定めた条件が正式承認され、2017年3月に始まった英EU交渉が終結した。しかし、織り込み済みであったためか、市場の反応は殆ど見られなかった。むしろ、内閣筋の情報として、英保守党の離脱派議員の懐柔に首相辞任が必要と伝わると1.2734まで売られた。

■ 今月の見通し

臨時のEU首脳会議で、離脱合意文書が正式合意されたため、英政府は合意案を下院に持ち帰り、計5日間の審議を経て12月11日に議会採決で可否を問う。下院での主な争点は、引き続きアイルランド国境を巡るバックストップ案となるだろう。同案がネックとなり、英議会で否決される可能性は高い。北アイルランドにのみEU規制が適用されることが明確になったため、与党に閣外協力するDUPの支持を得るのは、一層困難になった。執筆時点の離脱合意では、新通商合意は2020年末までの締結を目指し、間に合わなければ、バックストップが発動され、英国はEUの関税同盟に事実上とどまる。移行期間延長については、2020年7月1日より前に英国がEUに要請すれば、一定期間延長できるとした等、より親EU色が強いことから離脱派の強い反対も想定される。可決されれば、EU離脱合意法案が策定され、再び議会で可否が問われる。一方、否決された場合、政府は代替案を示すために21日間の猶予が与えられる。時間的猶予は殆ど無いことから、否決は、合意なしの離脱に直結しかねない。英首相が、議会在合意案不支持なら離脱そのものの断念し「EU離脱しない選択肢がある」と発言したことも物議を醸したが、首相権限の法的根拠は乏しい。薄氷の合意を秩序ある出口へ導くには首相の手腕が問われるが、否決となれば、首相辞任と総選挙、2度目の国民投票も現実味を帯びる。英紙報道(21日付)によると、既に100名以上の保守党議員が反対票を投じる意向を示しており、殆ど否決シナリオが既定路線。英世論調査では、メイ首相の離脱交渉に7割以上が不支持とされ、総選挙となれば政権交代の確度が高い。12月9日に予定されるメイ英首相とコービン労働党党首のテレビ討論は、選挙の前哨戦との意味合いも出てくる。英議会で可決できたとしても、アイルランド、スペイン等のEU各国議会で否決される可能性も孕む。英生産拠点を持つ企業のコンティンジェンシー・プラン(最悪の事態への備え)発動の判断において、12月はまさに天王山。ポンドは一段と神経質な動きとなりそうだ。英金融政策を巡っては、英中銀からEU離脱が金融システムや広範な経済に及ぼすと想定される影響について、分析結果をまとめ、11月29日に英下院の財務特別委員会で公表される。英EU離脱を巡る英金融政策運営を占うヒントとなるだろう。直近の英中銀総裁の発言では、合意案を支持する一方、離脱した場合に、中銀が利下げすることを想定してはならないと強調されている。

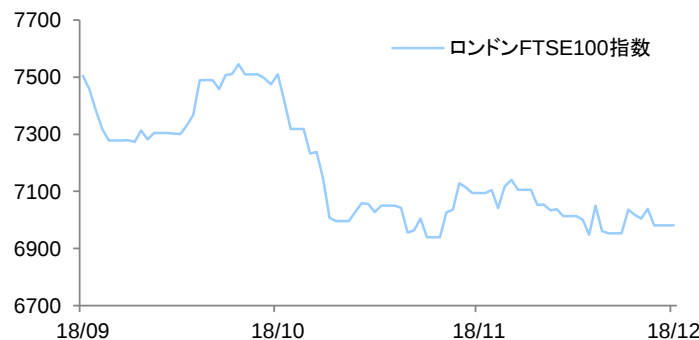
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	製造業PMI	10月	53.0	51.1	53.6
11/2	建設業PMI	10月	52.0	53.2	52.1
11/5	サービス業PMI	10月	53.3	52.2	53.9
11/9	鉱工業生産(前年比)	9月	0.4%	0.0%	1.0%
11/9	製造業生産(前年比)	9月	0.4%	0.5%	1.3%
11/9	GDP確定値(前年比)	3Q	1.5%	1.5%	1.2%
11/13	ILO失業率	7-9月	4.0%	4.1%	4.0%
11/14	消費者物価指数(前年比)	10月	2.5%	2.4%	2.4%
11/15	小売売上高(含自動車/前年比)	10月	2.8%	2.2%	3.3%

豪ドル相場

予想レンジ: AUD/USD 0.7100 ~ 0.7400
AUD/JPY 80.50 ~ 84.00

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 今村 加奈子

■ 先月の為替相場

豪ドルは11月初旬0.70台から一時0.73半ばまで反発した。

11月初旬、豪ドルは0.7075近辺でオープン、豪州9月貿易黒字は予想A\$1700Mioを大幅に上回るA\$3017Mioの好結果となり、0.7130近辺へ上伸した。米中首脳の間通商問題についての電話協議を受け市場期待が膨らみ米株上昇、豪ドルは0.7210まで堅調推移を示した。6日、予想通りの豪州準備銀行(RBA)理事会では金利1.50%据置で豪ドルへの影響はほとんど見られず0.72前半で横ばい推移。注目された米中間選挙では、共和党の上院過半数維持と民主党の下院過半数奪回は市場予想範囲内ながら神経質な値動きとなり、欧米株式の上昇に安堵し0.7300まで上昇。8日FOMCは予想通り金利据置で豪ドルは0.72後半～0.7300近辺で取引された。

11月中旬、不安定な米株式下落を嫌気して0.71半ばまで値を落としたが、英国のEU離脱草案合意を注目する中、0.7200値固めする動きが見られた。15日、豪州10月の高い就業者数増加や予想より低い失業率5.0%を受け0.7300手前まで上昇、その勢い継続し豪ドルは0.73前半まで値を伸ばした。しかし、原油(WTI)安と欧米株式急落は、リスク通貨豪ドルを圧迫し0.72前半へ反落した。

11月後半、主要株式の下落を不安視して豪ドルは下値試したが0.7202でサポートされた。22日の米感謝祭祝日を控え市場は様子見となり、世界景気減速の話が取り沙汰される中、豪ドルは0.72台での商いが見られた。28日、FRBパウエル議長の発言「米国の政策金利は中立とされるレンジをわずかに下回る」は以前よりトーンダウンした印象を市場に与えドル売り、豪ドルは0.73半ばまで急伸し、12月1日の米中首脳会議を控える中、豪ドルは0.73前半で取引された。

■ 今月の見通し

12月の豪ドルは、前月に見られた豪ドル買い戻しを維持できるかどうか。

米連邦公開市場委員会(FOMC)は12月19日に開かれる。市場で利上げ0.25%が8割程度織り込まれていることから、その利上げ実施確認より、声明やFEDメンバーの政策金利見通し(ドットチャート)に変化があるかどうか焦点となる。ドットチャートの内容次第で米ドル売りあるいは買いとなり、それが豪ドルへ影響しよう。来年、緩やかな米金利上げを予想されているが、FEDメンバーはどの水準まで利上げかは意見が分かれ始めている。

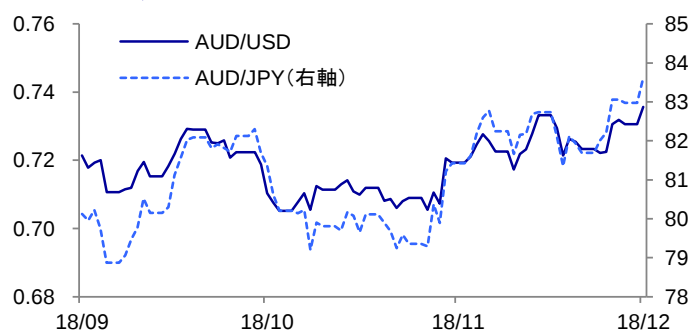
先月の豪州準備銀行(RBA)四半期ごとの金融政策報告書では、『目先に金利を変更する強い根拠なし、豪州GDPは2018年3.5%・2019年と2020年は3.25%の見通し、基調インフレ率は2018年末1.75%・20年末は2.25%の見通し、失業率は2019年末5.0%・2020年末には4.75%へ低下見込み』が示された。しばらく政策金利1.50%据置の市場予想に変化なしの再確認となった。

12月1日に予定されている米中首脳会談での貿易摩擦の行方が注目される。今月11日には英国議会は欧州連合と合意した離脱案を採決予定であり、それら結果で世界の主要株式が大幅に動く場合は豪ドルへも影響する可能性がある。株式下落はリスク通貨豪ドル売り、株式上昇はリスク選好から豪ドルサポートに傾き易いので注意したい。

12月第一週は多くの重要な豪州の経済指標が発表される。12月3日(月)7月～9月期企業収益、12月4日(火)7月～9月期経常収支、12月5日(水)7月～9月期GDP、12月6日(木)の10月貿易収支と小売売上高などが予定されている。豪州は高い家計債務と家計所得の伸び鈍化が懸念されるなかで、豪州景気の内容を探る展開となろう。

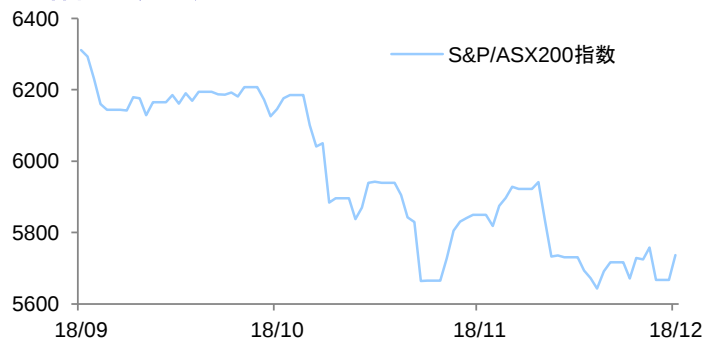
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント
11/2	小売売上高
11/6	豪州準備銀行理事会
11/14	賃金指数 前年比
11/15	就業者数
11/15	失業率
11/15	労働参加率

(資料)ブルームバーク

期間	予想	結果	前回
9月	0.3%	0.2%	0.3%
11月	1.5%据置	1.5%据置	1.5%据置
7～9月	2.3%	2.3%	2.1%
10月	20千人	32.8千人	7.8千人
10月	5.1%	5.0%	5.0%
10月	65.5%	65.6%	65.5%

カナダドル相場

予想レンジ: USD/CAD 1.2900 ~ 1.3300
CAD/JPY 83.00 ~ 89.00

グローバルマーケティング業務部カナダ室 三木 順一郎

■ 先月の為替相場

11/7に予定されている米中間選挙を控え、USD/CADは1.31を挟んだ揉み合いにて11月をスタート。その後、原油価格の下落を受けて徐々に上値を試す展開、月間高値は1.3318(11/20)、月間安値は1.3049(11/2)。

2日に発表されたカナダ10月雇用統計は強弱ミックスの結果。雇用者数のヘッドラインこそ1.1万人増と市場予想1.5万人増を下回ったものの、フルタイム雇用者数は市場予想を大きく上回ったこと、失業率も5.8%に下落したことから一時USD/CADは下落。しかし平均時給の伸びが市場予想を下回ったことで結果大きくは動かず。

6日夜に実施された米中間選挙は上院を共和党、下院を民主党が過半数を占める事前予想通りの結果となったことから大きくは動かず。しかし8日、9月末に合意されたUSMCAについて、米国がかなりのレベルの文言調整を試みているとのロイターヘッドラインが流れたこと、翌9日にはWTI原油が節目の1バレル60ドルを下回ったことからUSD/CADは1.32台へ上昇。

16日にはクラリダFRB副議長が利上げに関して、「世界の経済成長を考慮に入れる必要がある」といったハト派発言を受けて米ドルが下落、USD/CADは再び1.31台前半に下落する。しかし、20日には止まらない原油下落、グローバルな株式市場の下落を背景に1.33台にまで上昇する局面も見られた。その後は23日のカナダ10月消費者物価指数、概ね予想通りとなった月末のカナダ7～9月期GDPの発表等も経て、CAD安地合の1.32から1.33近辺のレンジ推移にて月を終えた。

結局WTI原油期近先物は一時1バレル50ドルを割り込む49.65ドルまで下落した。10月高値同76.90ドルからは35%の下落を2ヶ月弱の間で記録したこととなる。

■ 今月の見通し

ポイントは原油価格の動向になろう。見通しを探る上でポイントは2つの側面、1つ目はグローバル経済への減速懸念、2つ目はOPECを中心とした産油国による減産戦略となろう。

1つ目のグローバル経済の減速懸念については、米国の利上げは継続されておりFRBも指摘するように多少の減速は見られよう。それがリセッション入りに繋がるのかとの価格織り込みは時期尚早である。米国経済指標については、センチメント系で緩みが見られつつあるものの、個人消費は引き続き堅調である。

注目はFRBのスタンス変化が12月FOMCで確認できるのか、ということになるだろうが、現状来年の利上げ及び経済見通しについて大きな変化は想定していない。カナダについても、今回のような原油価格下落、加えてWCSのスプレッド拡大における実体経済へのインパクトを計りながらではあるが、経済、インフレの状況は“そこそこ”な状況が続いていくと予想。カナダ中央銀行の金融政策もそれに沿ったものとなり、恐らくは次回来年1月に現状のコンセンサス通り追加利上げが実施されると見る。

11月末の米中首脳会談の結果次第で大きく見方を変える必要もあるだろうが、米中貿易摩擦に対する大きな結論は出ず、引き続き両国の交渉状況を見守っていく必要があると予想されるが、トランプ大統領としても過度なドル高は臨んでおらず、結局は適切な着地点を探る動きとなると予想。

2つ目の原油減産に関しては、OPEC及びロシアは引き続き米国からの牽制は受けつつも、価格次第で何らかの減産に繋がる施策は打ってくるのではと推定。まずは12月6日のオペック総会結果を確認することとなる。需給面で米国の増産は続いており、大幅な価格上昇も見込まないものの、1バレル50ドルまでの一方向の下落は余りに悲観的なグローバル経済見通しが反映されているのではと考えている。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の国民的アイドル』
カナダのアイドルというか、有名人で思いつく人は、映画タイタニックの主題歌で有名、世界の歌姫セリーヌ・ディオン、映画スピード、マトリックスの俳優キアヌ・リーブス、カナダ希望の星、ジャスティン・トルドー現首相、幻のソウル五輪男子100m金メダリスト、ベン・ジョンソンなど。でも今回ここで紹介すべき人物は、義足のマラソンランナー、テリー・フォックスでしょうか。1958年に生まれ、幼少時から様々なスポーツを経験してきた彼ですが、18歳の時右足に痛みを感じ、それが骨肉腫(骨のガン)であったことにより右足を切断しなければならなくなります。自分と同じようにガンという病気で苦しむ世界中の人々のために何かできることは無いかと考えた彼は、右足の切断から3年後にカナダ横断マラソンに挑戦します。ガンの研究資金の募金のため、ですが、そのマラソン挑戦は距離にして8000kmというから驚きです。

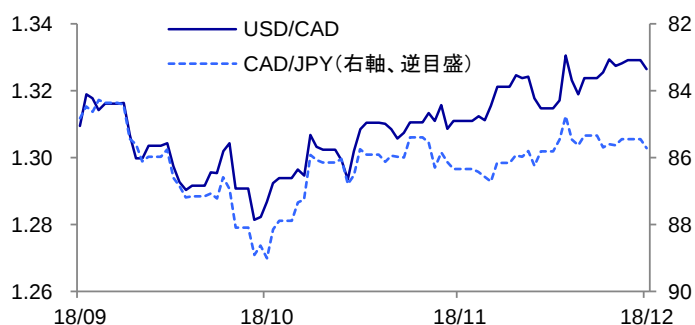
もちろん右足は義足、その状況で毎日40kmを走り続けた彼ですが、走行距離5000kmを過ぎたところで肺にガンの転移が見つかり、挑戦を断念、その1年弱後、22歳で帰らぬ人となったのです。

彼の挑戦であった募金、一人1ドルの募金を目指したこの挑戦は、カナダはもちろん世界中の人々の感動を呼び、これまでに数億ドルに達し、ガンの研究資金として使われているようです。挑戦25周年の2005年には記念1ドル硬貨が発行されています。

また今でもテリーフォックスランと称して、チャリティーマラソンが世界各国で行われており、日本の札幌でも毎年イベントが開催されているようです。私の子供達も学校で習ってくるようで、テリー・フォックスって知ってるか、彼はこんな人なんだという話を聞かされたことがあります。まさにカナダの英雄ではないでしょうか。

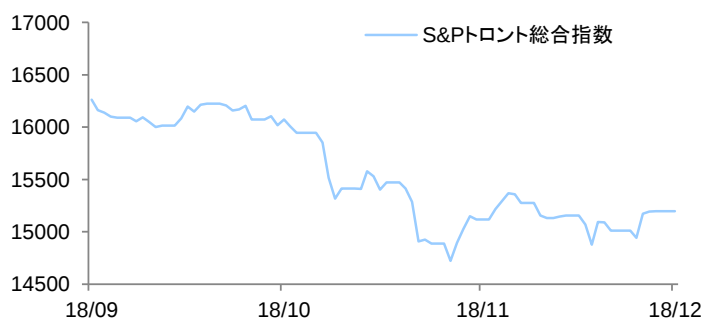
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/2	貿易収支	9月	0.20b	-0.42b	-0.55b
11/2	失業率	10月	5.9%	5.8%	5.9%
11/2	雇用者数変化	10月	15.0k	11.2k	63.3k
11/2	平均時給変化(前年比年率)	10月	2.3%	1.9%	2.2%
11/8	住宅着工件数	10月	198k	205.9k	189.7k
11/23	小売売上高(前月比)	9月	0.0%	0.2%	0.0%
11/23	消費者物価指数(前月比)	10月	0.1%	0.3%	-0.4%
11/23	消費者物価指数コア(前年比年率)	10月	1.9%	1.9%	1.9%
11/30	GDP(前月比)	9月	0.1%	-0.1%	0.1%
11/30	GDP(前年比年率換算)	Q3	2.0%	2.0%	2.9%

韓国ウォン相場

予想レンジ:	USD/KRW	1090	~	1140	(注)100韓国ウォンあたりの対円レート
	KRW/JPY	9.852	~	10.309	
	JPY/KRW	9.700	~	10.150	

ソウル資金室 下山 泰典

■ 先月の為替相場

先月のドル/ウォン相場は前月末対比下落した。月初は、1140.50でオープンし、同日に1141.80の今月高値をつけた。1日海外時間ならびに2日アジア時間に、トランプ大統領が中国との対話に本格的に乗り出すと捉えうる報道が相次ぎ、2日には1120近辺まで下落。特に2日にトランプ氏が米中間の貿易に関する合意文書の草案作成を指示したとの報道が大きかった(同報道は後にトランプ氏が否定したものの、同氏は中国との関係改善をアピールするなど、やや情報が錯綜した印象)。

翌週の注目材料は米国時間6日に行われた米中間選挙。結果の判明した7日アジア時間にはやや上下したが、大方の事前予想のとおり、上院は共和党が過半数を維持した一方、下院では民主党が奪回した。大方の予想どおりとなったことや、大きな不確定要素がなくなったことから、市場はややリスクオンの傾き、8日には今月安値となる1116.40まで下落した。なお、8日に結果が公表されたFOMCでは、政策金利は据え置かれた。

12日からの週は、ドル/ウォンは上昇。企業の決算発表が相次ぐ中で、米IT大手の主要製品の需要減の懸念等から米株が大きく下落したこと等が背景。13日には月の高値に迫る1140.40まで上昇した。その後は徐々に落ち着きを取り戻したが、16日の海外時間にクラリダFRB副議長が、足元の米政策金利は中立金利に近く、今後の利上げについては一部で減速している世界経済を注視する必要があるとの発言をし、米債利回りが低下、ドル売りが進行し、ドル/ウォンも水準を切り下げた。その後、19日の週は、22日に米感謝祭の祝日を控えていたこともあり、基本的には小幅な値動きに留まった。

30日に開催された韓国中銀の金融通貨委員会で、1年ぶりとなる25bpの利上げを決定した。数日前から徐々に織込みが進んだこともあり、発表後の動きはむしろ利益確定によるウォン売り等に傾斜。その後、総裁会見で米韓金利差拡大を懸念している旨の発言があり、来年の利上げもありうるかとの発想に繋がり、ややウォン買いに傾斜した。結局、1121.20でクローズした。

■ 今月の見通し

今月のドル/ウォン相場は、上値の重い展開を予想する。ポイントは、年末に絡む実需のウォン買い需要、および米中間の貿易摩擦などリスクセンチメントを左右する諸問題とみる。

注目された先月末のBOK会合は、1年ぶりの25bpの利上げで決着した。総裁会見で米韓金利差拡大に警戒感を示したことで、今後の追加利上げの可能性にも含みを持たせた形になっているが、米FRBも利上げのトーンを明らかに落としてきており、金融政策に絡む思惑は一旦は様子見となりそうだ。

かかる中で重要となるのは、年末に絡む実需のウォン買い需要と、米中貿易摩擦に代表される諸問題がリスクセンチメントに及ぼす影響だろう。昨年12月を振り返れば、ドル/ウォン相場は下落した。BOKによる追加利上げの可能性も意識されていたタイミングではあるため要因分解は困難であるものの、年末に絡む実需のウォン買いによってウォン高が進行した面がいくつかあると整理している。今年も同様の流れになりうると考えており、ドル/ウォン相場の基本線は月末にかけてやや上値の重い展開を予想している。

但し、本稿執筆時点では明らかになっていない、12月1日に開催される予定の米中首脳会談や、来年以降の米国の関税政策などには最大限の注意を要したい。特に、米中首脳会談の結果、リスクセンチメントが悪化する事態となればウォン売りは不可避となる。

実需のフローが影響しやすいと思われる月であり、ドル/ウォンの上値が押さえられる展開を基本線に考えておきたいが、米中の貿易摩擦等がリスクセンチメントを悪化させ、ウォン安に傾斜させる可能性については十分に注意しておきたい。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の国民的アイドル』

当地は今まさにアイドル戦国時代を迎えており、沢山のアイドルが凌ぎを削っています。ご存知のとおり世界的に活躍しているグループもあり、韓国を代表する産業の一つと言っているでしょう。

アイドルを目指すたくさんの卵たちから、華々しくデビューできるのは、ほんの一握りです。実力者が揃うアイドルグループを見ると、その裾の広さを感じずにはいられません。

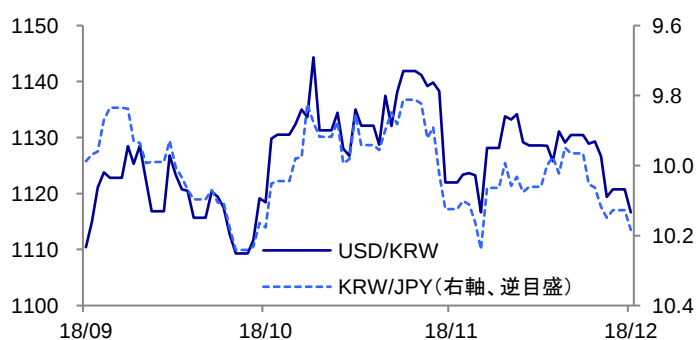
しかしながら、たとえアイドルとして華々しい舞台に立つことが出来ても、厳しい現実が待ち受けます。当地のアイドルは練習生として事務所の養成所で過ごし、専属契約でデビューするのが一般的です。練習生の期間は、ダンスや歌などのトレーニング、下宿代などを全て事務所が負担します。良いように思うかもしれませんが、一説によると、デビューをすると練習生だった時代のコストが浮くまで給料が上がらない契約になっており、そのため大ヒットしているあのグループも、ほぼギャラなし状態ということもあるそうなんです。

さらに”魔の7年”という言葉があります。事務所との専属契約が大抵7年であることから、アイドルグループがことごとく7年で解散や脱退をしてしまうためです。「このままアイドルをやっている、食べていけない」という露骨な言葉を残して去ることもしばしば。これからの第二の人生頑張ってくださいと応援せずにはいられません。

しかし、そんな辛いアイドルに救世主が現われています。それが、クラウドファンディングです。出資額にあわせて特典を用意するなど、CDやコンサートといった等価なサービスではなく、際限ない課金性と投資性を備えており、アイドルの新しい稼ぎ方になっています。これでアイドルたちも少し早く肩の荷が下りるかもしれません。長くファンに寄り添えるアイドルグループが増えてくれることを期待します。(ソウル支店 山崎)

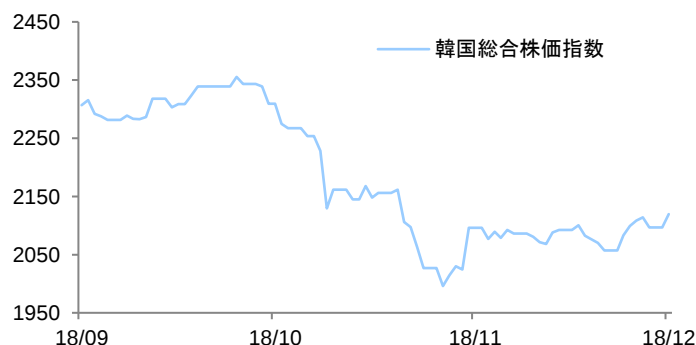
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	CPI(前年比)	10月	2.0%	2.0%	1.9%
11/1	輸出(前年比)	10月	18.0%	22.7%	-8.2%
11/1	輸入(前年比)	10月	19.9%	27.9%	-1.6%
11/6	経常収支	9月	-	\$10831.4M	\$8439.8M
11/14	失業率	10月	4.0%	3.9%	4.0%
11/30	BOK政策金利	-	1.75%	1.75%	1.50%
11/30	鉱工業生産(前年比)	10月	6.9%	10.7%	-8.4%

台湾ドル相場

予想レンジ: USD/TWD 30.50 ~ 31.10
TWD/JPY 3.58 ~ 3.74

台北資金室 三浦 勇二

■ 先月の為替相場

11月のドル/台湾ドル相場は、ドル安台湾ドル高。

月初のドル/台湾ドルは30.940でオープン。台湾株の堅調な推移を受けて海外資金の流入が増加したことや、トランプ米大統領が11月末のG20首脳会議に合わせ、中国との貿易合意に関する草案作成を指示したとの報道を好感した人民元高を背景にドル/台湾ドルは11/2に11月の安値となる30.646までドル安台湾ドル高が進行。

その後は米中間選挙を控えて様子見姿勢が強まる中、30.7ちょうどを挟んで方向感のない推移が継続。開票結果に関する報道が出始めた11/7は、序盤は共和党優勢との報道からドル買い優勢となるも、その後、下院では民主党が過半数を獲得するという見通しが強まると、上げ幅を縮小。結局、事前の世論調査の結果通りに上院は共和党、下院は民主党が過半数を獲得したことからドル/台湾ドル相場への影響も限定的に留まった。

一方、月半ばにかけてはイタリアの2019年度予算案に関するEU側との対立や、英国のEU離脱交渉への懸念から対ユーロでドル高が進むと、ドル/台湾ドルもドル買いの流れとなり、30.9台へと上昇した。

月後半は、株式市場からの海外資金の流出を受け、一時的に台湾ドル安が進む場面もみられたが、そうした局面では輸出企業のドル売りニーズも強く上値を押さえられる展開となった。なお、11/24に行われた台湾の統一地方選挙は、2020年に行われる総統選挙の前哨戦ともいわれ、注目を集めていたが、結果は与党・民進党が惨敗し、蔡英文総統が党主席を辞任。次期総統選でも民進党が苦しい戦いを強いられる見通しとなったが、事前世論調査から今回の選挙で苦戦することが濃厚であったこともあり、相場への影響は限定的とであった。

■ 今月の見通し

12月のドル/台湾ドル相場は、上値の重い推移を見込む。

11月に発表された経済指標をみると、10月の輸出額が前年比+7.3%と、前回(同+2.6%)から伸び率が拡大。プラス成長は8か月連続となった(春節の影響で一時的にマイナス成長となった2018年2月を除けば24か月連続でのプラス成長)。なお、単月の輸出額295.7億ドルは、過去3番目の高水準であった。製品別の内訳をみると、主力の電子部品は同+6.0%と堅調に推移したほか、金属製品(同+12.5%)、化学品(同+18.1%)も全体の伸びをけん引する形となった。地域別でも、全体の4割超を占める中国・香港向けが同+10.0%と堅調に推移した。10月の消費者物価指数は前年比+1.17%。携帯電話料金の値下げなどが影響し、9月(同+1.72%)から物価の伸びが鈍化。生鮮食品、エネルギーを除いたコア消費者物価指数についても同+0.72%と、前回の同+1.20%から鈍化した。

12月は引き続き、米国の金融政策が注目される。11月に入り、パウエルFRB議長やクラリダFRB副議長などから経済の減速を懸念するハト派的な発言が続いており、Fedの利上げ路線の転換も意識され始めている。そうした中、12月FOMCでの声明文の内容や、利上げ見通しの変化には注目が集まる。

また、月初の米中首脳会談後、米中通商問題に関して、交渉に進展がみられるかどうか注目される。進展がみられなければ、2019年から2000億ドル相当の中国製品に対する関税が25%引き上げられることとなるため、中国経済減速への懸念も広がりやすく、人民元安圧力につられ、台湾ドルにも売り圧力が強まりやすいか。

そのほか、台湾では四半期に一度の台湾中央銀行金融政策決定会合が開催される。しかしながら、前回(9月)会合以降に発表された経済指標にはそれほど大きな変化はみられないことから、今回も利上げは行われず、政策金利である公定歩合は1.375%で10回連続での据え置きとなることが見込まれており、相場の材料とはなり難い。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

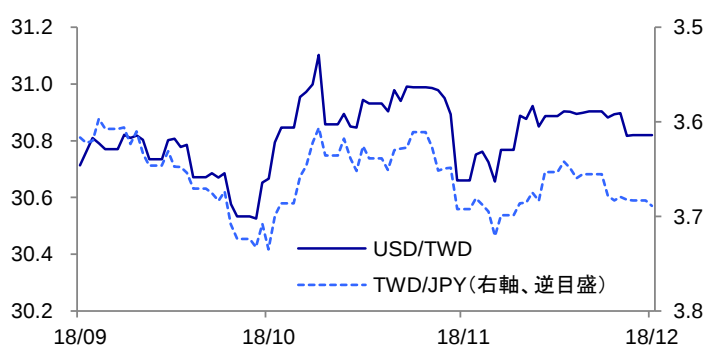
『当地の国民的アイドル』

台湾では、周子瑜というアイドルの人気が高いようです。ただ、彼女は台湾を拠点に活動しているというわけではありません。日本でも人気となっている韓国のグループ「TWICE」のメンバーのひとりです。台湾出身で、台湾のダンススクールに所属しているときに、韓国の芸能事務所にスカウトされ、デビューに至ったようです。海外で活動してはおりますが、台湾人ということで、台湾内でも特に人気が高くなっているようです。年末は紅白歌合戦にも出場するようですが、台湾でも紅白は放送されますので、多くのファンが観ると思われます。

そのほか、少し前までは郭雪芙という方も非常に人気がありました。女性アイドルグループ「ドリームガールズ」のメンバーで、世界の美女ベスト100という調査において、3年連続トップに輝いたこともあったようです。

■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/5	外貨準備高	10月	-	460.18B	460.44B
11/6	CPI(前年比)	10月	1.65%	1.17%	1.72%
11/7	輸出(前年比)	10月	8.00%	7.30%	2.60%
11/7	輸入(前年比)	10月	12.60%	17.60%	13.90%
11/7	貿易収支	10月	4.20B	3.36B	4.33B
11/20	輸出受注(前年比)	10月	3.90%	5.10%	4.20%
11/22	失業率	10月	3.70%	3.70%	3.70%
11/23	鉱工業生産(前年比)	10月	3.55%	8.25%	1.64%
11/30	GDP	Q3	2.30%	2.27%	2.28%

香港ドル相場

予想レンジ: USD/HKD 7.8100 ~ 7.8500
HKD/JPY 14.00 ~ 14.70

香港資金部 Ken Cheung

■ 先月の為替相場

【11月の香港ドル直物相場】

今月の香港ドル相場は、香港ドルと米ドルの金利差が拡大したにも関わらず、7.83香港ドルを下回る水準まで、香港ドルは上昇した。恐らくは、米Fedがタカ派色を弱めたことで、香港を含むアジア地域からの資本流出懸念が和らいだことが、その背景にあるものと考えられる。また、米中通商協議への期待感から、香港株式市場や人民元相場が落ち着きを取り戻しつつあることも、投資家心理を改善させた要因であろう。経済指標については、9月の小売売上高や第3四半期GDPが軟調な内容となったことで、香港の経済成長の鈍化が懸念される。不動産価格が下落していることも懸念点であるが、他方で10月の失業率は低水準の2.8%に留まっている。1年物の香港ドルフォワードポイントは、一時約7か月ぶりの水準となる▲552ポイントまで下落した後、▲500ポイント近辺での推移となっている。

【11月の香港ドル金利市場】

9月にプライムレート金利が+12.5bps引き上げられた後、四半期末の資金需要やIPOといった材料が無い中、翌日物の香港ドルHIBORは1%近辺に下落した。世界経済の不透明感高まりを背景に、資金借入需要が減退していることも、香港ドル金利の低下要因になっている。1ヶ月物の香港ドルHIBORは、一時0.99%と1%を割り込む水準まで低下した後、1.1%近辺まで戻す展開となった一方で、3ヶ月物の香港ドルHIBORは2%付近で安定的に推移した。1ヵ月物と3ヶ月物の香港ドルHIBOR・米ドルLIBORのスプレッドは、其々▲120bps・▲70bpsを超える水準にまで拡大。長期ゾーンについても、米Fedのタカ派色が後退したこと等を背景に、3年物・5年物の香港ドルIRS金利は其々2.7%、2.8%まで下落している。香港ドルの流動性状況を図る尺度として認識されている、HKMAの決済性預金残高は、ドル・香港ドルスポットレートが7.85香港ドルを下回る水準で推移し、為替介入が行われなかったことから、764億香港ドル付近で著変は無かった。

【11月の香港株式市場】

月間ベースで6か月連続の下落となっていたハンセン株価指数は、米中間の緊張緩和期待や人民元相場の落ち着きを背景に26,000ポイントレベルまで反発。G20サミットにおける米中通商協議進展への期待感が、投資家心理を改善させたことに加え、中国政府がより積極的に財政出動を行う方針を示したため、中国経済の下振れリスクが低減したこともその要因であろう。また、香港の利上げ期待が後退したことも株式センチメントをサポートした。

■ 今月の見通し

【12月の香港ドル直物相場】

12月の取引レンジは、7.81-7.85と予想する。米国と香港の金利差が拡大している一方で、米Fedのタカ派的な利上げスタンスへの警戒感が後退したことで、香港ドル市場からの資本流出圧力は和らいでいる。米中間の通商問題に係る緊張が緩和し、中国の成長減速見通しが底打ちしつつあることも、資本流出を留める要因になっている。しかしながら、米国・香港の金利差が拡大すると、米ドルロング・香港ドルショートによるキャリーポジション構築の動きが促されると考えられることから、ドル・香港ドルスポットレート of 更なる下落余地は限定的であろう。長期的には、香港経済成長の鈍化、不動産価格の調整、香港株の不透明な先行き見通しに鑑みて、ドル・香港ドルペッグ制の下で、香港からの資本流出圧力が更に高まる懸念が有る。1年物の香港ドルフォワードポイントは、年末の資金需要高を背景に、反発するものと予想する。

【12月の香港ドル金利市場】

年末の資金調達需要を背景に、香港ドル金利は反発するだろう。近時の香港ドル金利の低下と潤沢な流動性状況に鑑み、12月に予想される米利上げ後に、追隨して香港プライムレートが引き上げられる可能性は低下していると言えるが、引き続き我々は、米国が緩やかな利上げを継続する中で、香港においても利上げへの期待感を維持し、深刻な資本流出を防ぐためにも、12.5bpsの利上げが行われるものと予想している。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

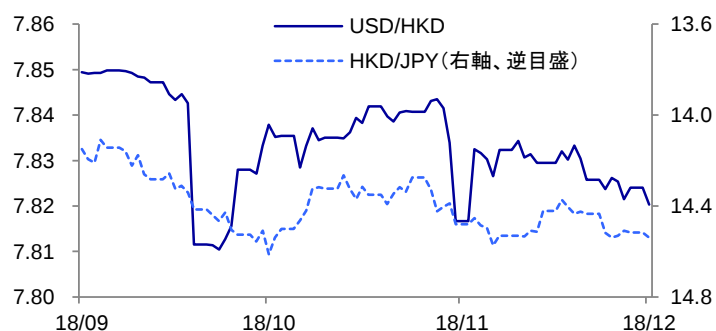
『当地の国民的アイドル』

香港には数多くの映画スターや歌手が存在するが、最も有名なのは、やはりカンフー映画スターの代表格であるジャッキー・チェンであろう。

また、武術家であれば、もちろんブルース・リーに触れぬ訳にはいかない。“The Big Boss” (ドラゴン危機一髪) や “Ways of the Dragon” (ドラゴンへの道) といった有名な映画への出演を経て、ブルース・リー香港を代表するスターとなった。1978年公開の “The Game of Death” (死亡遊戯) は彼が出演した最後の映画となったが、32歳という早すぎる死後も、彼の世界レベルでの人気は衰えるところを知らないのである。

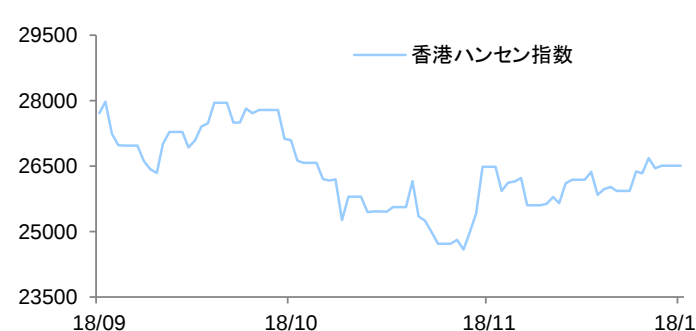
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	小売売上高(価額、前年比)	9月	6.7%	2.4%	9.4%
11/1	小売売上高(数量、前年比)	9月	4.4%	1.4%	7.9%
11/5	日経香港PMI	10月	--	48.6	47.9
11/7	外貨準備高	10月	--	\$423.1b	\$426.4b
11/16	GDP(前年比)	3Q	3.3%	2.9%	3.5%
11/16	失業率(季調済)	10月	2.8%	2.8%	2.8%
11/20	CPI(前年比)	10月	2.7%	2.7%	2.7%
11/26	輸出(前年比)	10月	9.4%	14.6%	4.5%
11/26	輸入(前年比)	10月	10.2%	13.1%	4.8%
11/26	貿易収支(HKD)	10月	-48.4b	-44.5b	-47.7b

中国人民元相場

予想レンジ:	USD/CNY	6.6500	~	7.0500
	CNY/JPY	15.32	~	17.29
	100JPY/CNY	5.7800	~	6.5300

みずほ銀行(中国)有限公司 中国為替資金部 大内 聡

■ 先月の為替相場

【為替相場】

11月のドル人民元相場は米中貿易摩擦や欧州情勢、原油市場下落等のヘッドラインに振られる展開となった。

月初、米トランプ大統領が”中国 習国家主席との電話会談を実施した”とツイッターで発言し米中貿易摩擦緩和への期待感が高まったこと、英国とEUが金融サービス分野で合意したとの報道からBREXITを巡る不透明感が後退したこと等からドル安人民元高の流れとなり、ドル人民元は一時9月以来の水準となる6.87台まで元高が進行した。その後、中国で開催された輸入博覧会や米中間選挙を波乱なく終え、ドルがじり高の展開となる中、英国内でBREXITに関する特別閣議が中止されたとの報道が流れるとドル高が加速。ドル人民元は一時直近高値付近となる6.9703まで上昇した。

月央にかけては原油価格の下落を受けたドル安や米中貿易協議再開とのヘッドラインを背景に人民元は再び上昇幅を拡大、6.94台まで人民元高が進行。その後は11月30日～12月1日の予定で開催されるG20および米中首脳会談を前に動意に乏しい展開となり、6.9半ばでの推移となった。

【金利相場】

10月の中国人民銀行(PBOC)による連日の資金供給の効果等もあり、市場流動性は潤沢な状況を継続。

11月以降、PBOCによる資金供給が連日で見送られていたこと、企業の税金の支払い等が重なったこと等から市場流動性は若干タイトになる局面も見られたものの、基本的には潤沢な状況が継続。O/N物は当局の思惑を睨みながらボラタイルな展開が継続。年末越えのターム物金利は上昇圧力がじりじりと強くなっているものの、市場全体の需給は安定している状況。

■ 今月の見通し

【為替市場】

G20及び米中首脳会談の結果に注目。報道ベースでは既に中国 劉鶴副首相と米ムニューシン財務長官が米中首脳会談に先駆けて貿易に関する協議を再開、中国は米国の貿易赤字解消に向けた譲歩案リストを米国側に提示したとされている。本稿執筆時点(11月27日時点)では米中首脳会談で貿易摩擦解消に向けた前向きな議論が行われることが想定されているが、26日の海外時間に米トランプ大統領が米対中通商政策に厳しい姿勢を示したことから予断を許さない状況が続いている。

米中首脳会談の内容が貿易摩擦の緩和を期待できる内容となれば人民元にとっては上昇材料となるだろう。一方、12月はFOMCによる今年最後の利上げが予想されていると共に、レパトリのドル買いの増加も想定されることから、ドル人民元相場は緩やかに上昇する地合を想定する。

米中首脳会談で貿易摩擦解消に一定程度の合意が見られなかった場合、人民元にとっては下落材料となり、米利上げやレパトリ等からドル高人民元安圧力が高まり易い地合となるだろう。心理的な節目である1ドル7元に前に直近高値ポイントである6.9780を挟む攻防に注目。

【金利市場】

引き続き低位安定局面を予想。

当局による緩和的な政策方針には変更なく、引き続き市場流動性、金利水準は安定して推移することを予想する。

既に年末越の資金調達ニーズも意識されることから、突発的な金利上昇圧力、当局による資金供給スタンスの動向には注意が必要。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の国民的アイドル』

当地でもご多分に漏れずアイドルグループは人気です。重慶出身の男性3人組のグループやオーディションで選出された女性アイドルグループ等々。日本に比べると(日本のアイドルもそうかもしれませんが)テーマ性をもったグループが多いように感じます。”清楚”、”向上”、”1つの夢”、”9人の仲間”、”3つの心得(信頼、愛、助力)”等々がアイドルグループのテーマになっていると思います。

日本で人気の48人組アイドルの当地版(2016年に日本から独立)SNH48(上海48)、その姉妹グループBEJ48(北京48)、GNZ48(広州48)、SHY48(瀋陽48)、CKG48(重慶48)と48人組だけみてもアイドルグループは豊富です。

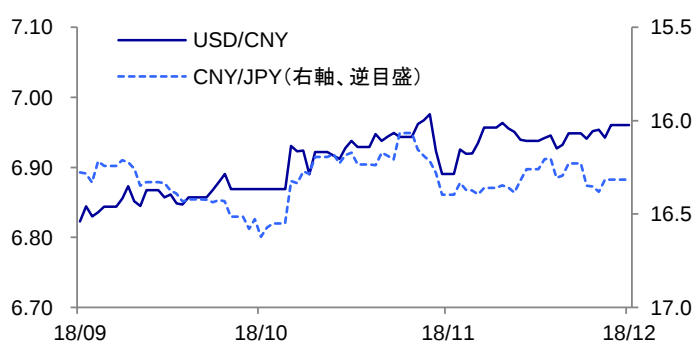
かくいう私も2014年に第1回 SNH48総選挙に参加し熱を上げていた一人ですが、その時から既に当地でのアイドル人気は相当なものがあつたと記憶しています。総選挙では順位を発表されたメンバーがグループでの夢、想いを熱く語っていたのが印象的でした。

人口の多い中国ですので当然アイドルの移り変わりも激しくオーディションも熾烈を極めていきます。当地ではK-popも盛んです。もしかすると日本以上のアイドル戦国時代に突入しているのかもしれない。

これを機に”アイドルから見る中国”という考察を進めていきたいと思います。(にわかアイドルファン 大内)

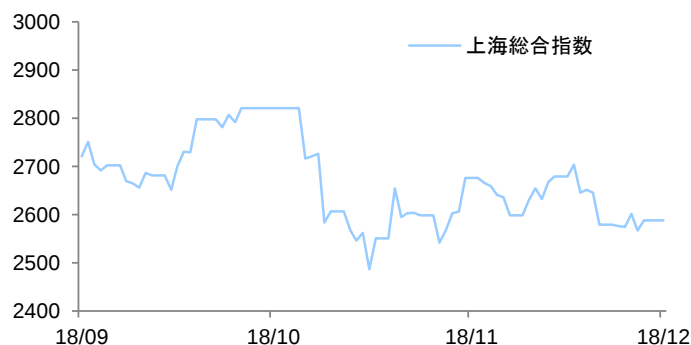
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/8	貿易収支(RMB建)	10月	237.00Bio	233.63Bio	210.38Bio
11/8	輸出(RMB建)前年比	10月	14.2%	20.1%	16.9%
11/8	輸入(RMB建)前年比	10月	17.7%	26.3%	17.5%
11/9	PPI(前年比)	10月	3.3%	3.3%	3.6%
11/9	CPI(前年比)	10月	2.5%	2.5%	2.5%
11/14	小売売上高(前年比)	10月	9.2%	8.6%	9.2%
11/14	鉱工業生産(前年比)	10月	5.8%	5.9%	5.8%

シンガポールドル相場

予想レンジ: USD/SGD 1.3650 ~ 1.3900
SGD/JPY 81.00 ~ 83.50

アジア・オセアニア資金部 前川 真也

■ 先月の為替相場

11月のシンガポールドル(SGD)相場は、1.37台前半から1.38台半ばまで上昇する場面も見られたが、結局行って来いの展開となった。

第一週、1日・2日中国のインフラ投資拡大計画が好感されてアジア通貨堅調に推移する中、SGDは1.38半ば付近から1.37前半まで買われた。

第二週、5日前週末から反動もあり、SGDは軟調に推移。7日米中間選挙の結果を睨みながら値の荒い展開。8日・9日は米中間選挙が無難に通過、米FOMCは政策金利の据え置き決定、引き続き12月利上げを示唆する内容で、ほぼ市場予想通りとなり、ドル買いが強まると、SGDは1.37後半まで売られる展開となった。

第三週、12日はドル高地合いは変わらず、CNYの下落が続く中、SGDは軟調に推移。13日米財務長官と中国副首相が電話会議を行っていたことが報じられ、同首相が米中対話再開の動きが市場で好感された、SGD含むアジア通貨は買い戻される展開となった。14日以降、英国とEUが離脱協定の草案で合意したことが好感され、ポンドが上昇、ドルが弱含む中、SGDは1.37台半ばまで上昇した。16日クラリダFRB副議長が「世界的な減速を示唆する証拠はある」と発言したことに伴うドル売りが強まり、SGDは1.37台前半まで上昇する展開となった。

第四週、20日、21日と米株安を受けた世界経済に対する先行き不透明感が強まる中、SGD含めたアジア通貨は総じて軟調に推移。23日シンガポール10月CPIが発表となったが、ほぼ市場予想通りの結果となり、相場への影響は限定的となった。

第五週、26日以降、米株高によるドル買い地合いが強まる中、SGDは1.37台後半まで上昇、その後はレンジ内での取引となった。

■ 今月の見通し

12月のシンガポールドル(SGD)相場は、シンガポール通貨庁(MAS)によるSGD高誘導政策を継続するものの、欧州関連の懸念が強まりを背景に対欧州通貨でドルが相対的に強含む可能性が高い。12月FOMCでの利上げ見通しは変わらず、ドル高の支援材料となる中、SGDは弱含む推移となる。

先月発表されたシンガポール経済指標は、非石油地場輸出や鉱工業生産等良好な結果が確認され、シンガポール経済の底堅さが確認できる。MASは、10月に発表されたSGD高誘導を継続することになる。

一方、欧州関連では懸念が一層強まっている印象を受ける。ようやく英国政府とEU間で離脱協定が合意を見たものの、次の問題として、その合意をもってメイ英種族が国内議会の説得をできるか否かという「内なる戦い」である。依然として「合意なき離脱リスク」は現実的に想定すべきリスクに格上げされている状況である。対欧州通貨で、ドルが強含む、相対的にドル高地合いとなる。

また、次回のFOMC(12月19日)と今後の利上げ見通しも注目される。「FRBの正常化プロセスが緩やかに継続する」という前提のもと、12月利上げは、市場ではほぼ織り込まれている。先月、「米金融当局は政策決定に際して世界の経済成長を考慮に入れる必要がある。」とのクラリダFRB副議長の弱気な発言を捉え、金利が大きく低下する場面も見られたが、株式市場の動揺に脇目も振らず、「中立金利3%想定までは上げる」という姿勢を続けている状況は、当面変わりそうにない。利上げ路線に大きな変更はなく、引き続きドル高をサポートする要因となる。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

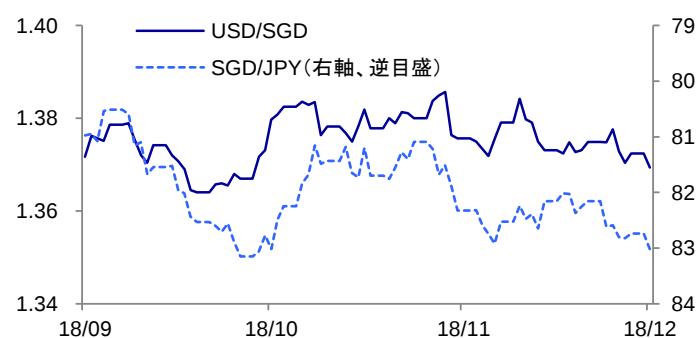
『当地の国民的アイドル』
正直、シンガポールのアイドルが全く分からなかったの
で、詳しく現地男性NSにヒアリングしてみました。

(筆者)「シンガポールにAKB48みたいなアイドルっているの？」
(NS)「んー。いない。K-POPは若い人に人気あるよ。」
(筆者)「そうなんだ。ちなみに日本のアイドルは人気あるの？」
(NS)「人によるんじゃないかなー。時々、日本のアイドルが来てライブやってるのは知ってるよ。」
(筆者)「(今のところ何の情報も無くやや焦りぎみ) じゃあシンガポールで人気の歌手でいいから教えて。」
(NS)「Joanna Dongは、人気あるし好きだよ。」

筆者調べですが、シンガポールには日本のアイドルのような存在はいないようです。JoannaDongさんを調べてみましたが、ジャズやボサノバを歌う本格派なシンガポリアンの歌手でした。同じ東南アジア地域のバンコクやジャカルタにはAKBグループが進出しているようですが、シンガポールに進出しないのは何か理由があるのかしらとふつふつと興味が湧いてきている次第です。(小川 力)

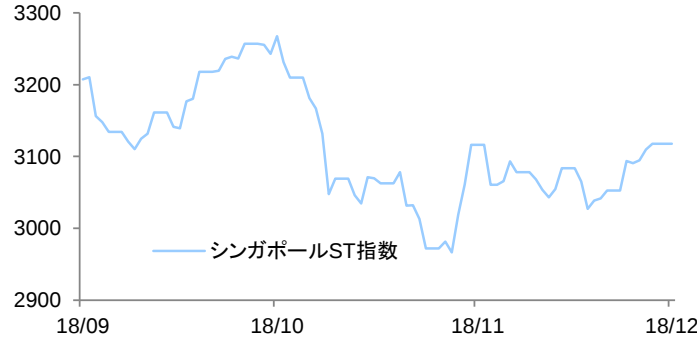
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

(資料)ブルームバーグ

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/2	購買部景気指数	10月	52.2	51.9	52.4
11/12	小売売上高 (前年比)	9月	2.1%	1.9%	-0.4%
11/16	非石油地場輸出 (前年比)	10月	1.0%	8.3%	8.1%
11/23	GDP	3QF	2.4%	2.2%	2.6%
11/23	CPI (前年比)	10月	0.8%	0.7%	0.7%
11/26	鉱工業生産 (前年比)	10月	2.6%	4.3%	-0.1%

タイバーツ相場

予想レンジ: USD/THB 32.50 ~ 33.50
THB/JPY 3.35 ~ 3.48

バンコック資金室 山崎 浩幸

■ 先月の為替相場

月初1日のドルバーツは32.90近辺でオープン。タイの10月消費者物価指数は前年比1.23%と市場予想を下回るも、米中の貿易戦争に関する懸念が後退すると、バーツ高が進展し、翌日にかけて32.80付近まで下落。週明けの5日、10月のタイ消費者信頼感指数は前月の82.3から81.3に低下したことが示され、33.00近辺まで上昇。6日は米中間選挙の発表を控え32.90台での小動きの展開が7日にかけて続き、結果が事前予想通りとなるも、上下院のねじれ状態が懸念されたため、ドル売りが優勢となると、32.80近辺まで下落した。ところが、その後はイベント通過したことで買い安心感から米株が上昇、さらに米FOMCで、景気について雇用と個人消費の判断が引き上げられたことがややタカ派と捉えられ、ドル買いが優勢の展開となり9日にかけてドルバーツは33.00台を回復。

週が変わって、12日には米国休日であったが先週の流れから、一時33.10台半ばまで上昇。ところが、14日のタイ中銀の金融政策委員会(MPC)を控えて神経質な値動きとなり、フロー主導で32.90台前半まで下落した。14日、注目されたMPCでは市場予想通り4:3で政策金利1.50%が据え置かれ、次回MPCでの利上げ期待が高まるも、声明文ではタイの経済成長及びインフレに関するトーンがやや弱まっていたことから、反転上昇し33台へ値を戻した。ところが、株式市場のボラティリティ上昇等を受けて米国の来年度の利上げ期待が後退すると、ドルバーツは下値を試す展開となり16日には32.80に迫るまでに値を下げた。しかし、19日に発表された18年7-9月期タイGDPが外需の悪化を要因に前年比+3.3%(予想:同+4.2%)と不芳な結果となるとドルバーツは反発し、結局32.9台半ば～後半へ再び値を戻した。

22日には、タイ中銀のウィラタイ総裁は非常に低い金利であり続ける必要は無いと発言するも、相場への影響は限定的。23日は人民元安を受けて、一時33台後半まで上昇するも、週が空けて26日には原油価格の反発から株式市場が上昇すると、上値の重い展開となり、じりじりと33付近へと下落した。その後は、33を挟んだ値動きが続くも、28日にパウエルFRB議長が政策金利が中立レンジを「わずかに下回る」水準にあるとの見方を示すとドル売りが進行し、一気に32.90を割込んだ。その後は一旦32.90を回復するも、月末に発表された貿易統計で輸出の回復が示されると、月末需要も重なりバーツ高が進行し32.90を割込んだ。

■ 今月の見通し

12月の見通しとして、最大の注目は12月19日に予定されているMPCにおいて、政策金利を約3年8ヶ月ぶりに引き上げるかどうかであると考え。11月に発表された7-9月期のGDPは前年比+3.3%と予想(同+4.2%)を大きく裏切る結果となり、12月の利上げを危ぶむ声が強まった。この結果は、外需(輸出)の低下が主要因であるとの説明であり、一過性であることから、年間のGDP成長率予想は据置かれている。このことを裏付けるように、11月末に発表された、10月のタイ輸出は前年比で+8.4%増と大きく復活し、タイ経済の強さを証明したと思われる。

しかしながら、ここへ来て米国の利上げ見通しに陰りが出てきたことにも注目が必要かと考える。28日にパウエルFRB議長が講演で、政策金利が中立レンジを「わずかに下回る」水準にあるとの見方を示したことで、来年度の利上げ見通しが大きく後退したことで、ドル売りの流れが強まったことは、今後のドルバーツはバーツ高、ドル安となるものと予想する。しかし、米国の政策金利引き上げ期待の後退は、過度な引き上げが後退する、従来予想対比で緩やかなスタンスとなることから、来年度の経済に明るい材料となりえるものであり、金融政策がうまく機能し経済が拡大を続けることができるのであれば、長期的にみてドル高要因となる可能性もあるかと考える。しかし、12月の値動きとしては、ややバーツ高となるものと予想しておきたい。

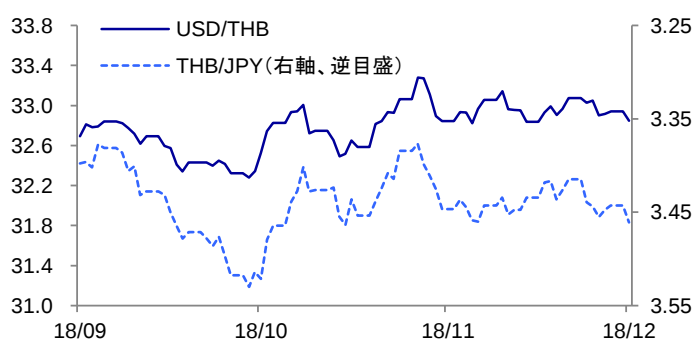
■ 今月のつぶやき(現地からの声)

〈当地の国民的アイドル〉

タイの国民的アイドルは、やはり日本の方にはおなじみのAKB48グループの一つであるBNK48かと思う。2016年3月にその結成が発表され、お披露目は2017年2月のこと。2017年8月にはAKBの「会いたかった」のタイ語バージョン「Aitakatta」でCDデビュー。続いて発表された「恋するフォーチュンクッキー」のタイ語バージョン「Koisuru Fortune Cookie」は発表からわずか4ヶ月で再生回数が1億回を越えたり、コンサートチケットが即完売する等、タイ国内で人気を博しており、いろいろな広告に出演したりとその活躍の場を広げており、BNK48劇場や、BNK48ショップ、BNK48カフェも開設され、AKB48顔負けの活躍をタイで繰り広げている。BNK48はかなり有名になったように思いますが、今回ご照会したいのは、「ヤーヤー=ウツサヤー セパーパン(Yaya-Urassaya Sperbund)さんです。彼女は最近注目を浴びているそうです。また、このヤーヤーと一緒に仕事する機会が多い、俳優のナデートさんも大変有名です。この二人は「みんなが憧れるカップル」としても知られているとの事ですが、当人はカップルであることを8年間も否定し続けているそう。しかし、このナデートさんは、タイの至るところにある広告に出ているので、私でも見たことがあるほどの大変有名な方で、日本の企業の広告にも参加しています。と、いろいろ書きましたが、タイ語のテレビの世界なので、こうやって調べるまで名前もしらないのが実情でしたが、この寄稿のために、今まで顔を見るたびに誰だろうと思っていたことが解決できてすっきりできました。

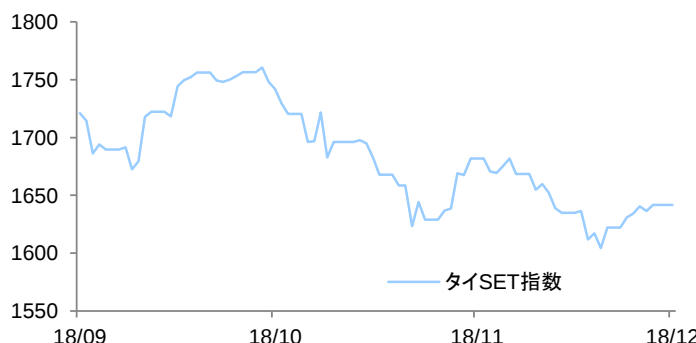
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/01	消費者物価指数(前年比)	10月	1.33%	1.23%	1.33%
11/01	CPIコア(前年比)	10月	0.80%	0.75%	0.80%
11/05	消費者景気信頼感指数	10月	-	81.3	82.3
11/14	タイ中銀金融政策委員会		1.5%	1.5%	1.5%
11/19	タイGDP	3Q	4.2%	3.3%	4.6%
11/30	輸出	10月	-	8.40%	-5.50%
11/30	貿易収支	10月	-	13.30%	14.3%
11/30	経常収支	10月	\$2,000M	\$1,888M	\$2,369M

マレーシアリング相場

予想レンジ:	USD/MYR	4.1500	~	4.2500
	MYR/JPY	26.50	~	27.20
	JPY/MYR	3.6800	~	3.7750

マレーシアみずほ銀行 関上 伸一

■ 先月の為替相場

MYRは貿易戦争関連や米中間選挙等のイベントに振られる中、4.15-4.20 レンジでの推移となった。

月初MYRは、原油(北海ブレント)\$75/bbl割れと政府予算への警戒感から、1日に1年ぶりの安値となる4.1860を付けた。しかしながら、トランプ大統領が「習近平総書記と貿易協定締結を議論中」と発言し、翌2日に同大統領が中国との貿易協定の策定を開始するよう官僚に指示した旨が伝わると、原油価格に連れてMYRも4.1600迄反発。2日発表された2019年度政府予算案は、前政権のレガシーから政府債務がずしりと押し掛かる中で、2018年の着地は過去五年で最大となる財政赤字を示した。格付機関は新政権による財政の透明化に一定の評価を与える一方で、政府債務の水準と石油関連歳入への依存度の高さに警鐘を鳴らす。国内為替市場はこの予算発表には冷静に反応し、大きな動きはなし。6日投開票の米中間選挙で、事前予想通り共和党は上院過半数を維持も、下院を民主党に明け渡した。下院も共和の場合は貿易戦争の事態が悪化するとの観測もあったことから資産市場がリスクオンで反応すると、MYRも8日に4.1540まで反発するが、結局ここが月間高値。同日夜の米FOMCは予想通り政策金利据置きも、追加利上げに前向きなFRBの姿勢が米金利とUSDを押し上げた格好。原油統落と相俟って、MYRは4.18手前まで下落。

中旬には、トランプ大統領がOPECに減産回避を要請との報道から13日にブレントが一時65ドル割れ迄急落。2019年度政府予算案で原油関連歳入への依存度が高まっていたことは記憶に新しく、オイル・ガス関連企業収益や政府歳入への懸念を煽った格好でMYRは15日に4.1970まで安値更新。16日の第三四半期GDP: 前年同期比+4.4%は事前予想(+4.6%)比弱め。

下旬は「金融政策決定には世界経済の成長を考慮要」(クラリダFRB副議長)との発言がドル安を誘うものの、ブレントが統落するとMYRは依然軟調地合で21日に4.2000をタッチ。以降は4.19台で推移も、27日にブレントが一時60ドルを割込むと、28日には4.2025迄安値を更新。同日夕刻時点で4.19-20での推移となっている。

■ 今月の見通し

12月のMYR相場は4.15-4.25 レベルでの推移を予想。マレーシア新政権は海外投資家・格付機関の注目を集めた2019年度政府予算案を無難に通過も、拡大した財政赤字から財政健全化には一定の時間を要すると見られること、新興国市場からの資本流出が懸念される中で海外投資家の回帰本格化は来年以降になると見られることから、目先MYRは軟調地合継続と見る。

注目の政府予算は、カジノ税の強化、政府資産売却やインフラ事業見直し等で歳入強化・歳出抑制を図りつつ、特に低所得者層に焦点をあてた民間消費刺激策でGDP成長率の下支えを狙うもので、予てよりマハティール首相が口にしている「富の再分配」の思想が底流に存在。2018年財政赤字対GDP比率は▲3.7%と、前政権による計画値(▲2.8%)からの拡大を許容する積極財政政策であり、実質的な政府債務の対GDP比率を2017年の80%から19年の72%まで改善させることがボトムライン、且つ格付機関へのコミットメントと映る。事前に懸念された新税は消費者行動に大きな影響を与えるようなものとはならなかった点も安堵感あり。大手格付機関の反応もモデレートで、短期的な格下リスクは後退した印象。16日発表の3Q GDPは一時的なLNG及びバームオイルの供給悪化が陰を落とした格好で予想比弱めとなったが、ネット純輸出の回復と相俟って、4Qから来年にかけては底入れする可能性が高い。

一方で、貿易戦争と共に新興国市場からの資本流出リスクが懸念材料。8日金融政策決定会合で中銀は予想通り政策金利の据置きを決定したが、その声明の冒頭パラグラフで、「一部先進国の金融政策正常化に伴う新興国からの資本流出リスク」という環境認識を表明。経常収支は黒字基調継続の見通してアジア諸国内では相対優位にあると考えられるが、政府は今次予算にて赤字構造となっているサービス収支に関連し、輸入サービス税を導入。税収底入れとあわせて、同赤字拡大の歯止めの策とも見られる。

いずれにせよ財政健全化には一定の時間が掛かる見通しであり、MYRへの資本回帰本格化は来年以降になると予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の国民的アイドル』

今月のテーマは中年邦人派遣の私には若干高めですが、当デスクのスタッフに聞くと、アイドルと云えば、女性歌手のシティ・ヌールハリザとシーラ・アムザの二人が一、二を争う人気でした(人によって好みが分かれる気もしますが…)。日本の皆様には余り馴染みがないかと思いますが、ググって頂くと写真が沢山出てきます。特に前者はマレー人ですが、中国語(普通話)のヒット曲も飛ばしています。

日本の皆さんがご存知なところでは、少し年代が上がりますが、ボンドガールのミシェル・ヨーも当地で著名な女優で、2013年にタンスリの称号を国王から授与されています。

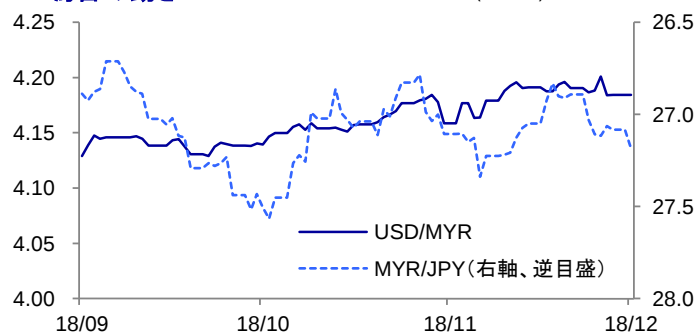
ミシェル・ヨーはイポーの出身ですが、同じくイポー出身で「情歌王子」の異名を持つ歌手の光良(グアンリヤン)も、最近では日本でもコンサートを行っているようです。確かに彼のヒットナンバー「童話」は、アジアの中国語カラオケでも日本人派遣者から高い支持を集めている印象です。

日本でのコンサートと云うと、今年11月頭に東京新宿でライブを敢行したエミーサーチは、参加した友人によれば「1980年代のマレーシアのロックシーンを代表するレジェンド」との評です。最早国民的「アイドル」とは云えないかも知れませんが、同僚に聞いてみても、30代半ば以上のマレー人の心に深く刻まれているようです。

おっと、忘れてはいけません。今、当地メディアで最も注目集めている国民的コミックスターと云えば、そうです、ナジブ前首相です。

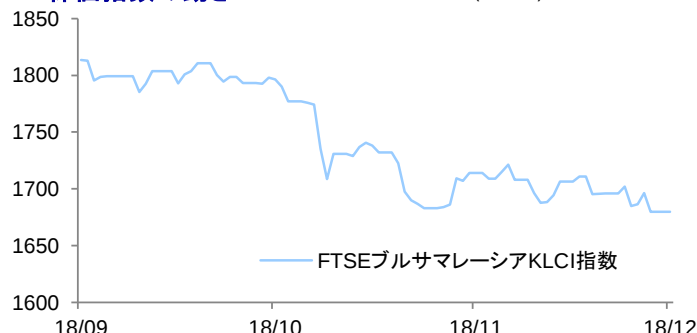
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

(資料) ブルームバーク

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/5	Trade Balance	Sep	6.65bln	15.27bln	1.61bln
11/5	Import(y/y)	Sep	10.0%	-2.7%	11.2%
11/5	Export(y/y)	Sep	6.7%	6.7%	-0.3%
11/7	Foreign Reserves	31-Oct	-	101.7bln	102.8bln
11/8	Overnight Policy Rate		3.25%	3.25%	3.25%
11/9	Industrial Production YoY	Sep	2.30%	2.30%	2.20%
11/16	GDP	3Q	4.60%	4.40%	2.20%
11/16	Current Account Balance	3Q	-	3.8bln	3.9bln
11/22	Foreign Reserves	15-Nov	-	102.1bln	101.7bln
11/23	CPI(y/y)	Oct	0.6%	0.6%	0.3%

インドネシアルピア相場

予想レンジ:

USD/IDR 14200 ~ 15500
IDR/JPY 0.71 ~ 0.80
JPY/IDR 125.00 ~ 141.00

(注) 100インドネシアルピアあたりの対円レート

アジア・オセアニア資金部 河合 良介

■ 先月の為替相場

11月のドルルピアは、14450～15200のレンジでの推移となり、ドルルピアは下落した。

月初、15180近辺でスタートしたドルルピアは、月初より、原油価格の下落、米中首脳が貿易摩擦解消に向けて楽観的な見方を示したことで、リスクオフムードの後退から、海外からの資金が流入し、ドルルピアは下落。米中間選挙が市場予想通りの結果となったことで、市場の不透明感が払拭されたことも、ドルルピア下落に拍車をかけ、8日には一時14450をつけた。

この間、1日発表のインドネシア10月消費者物価指数は前年比+3.16%、5日発表のインドネシア7～9月期GDPが前年比+5.17%と、ほぼ市場予想通りの結果となり、相場への影響は限定的であった。また、7日発表のインドネシア10月外貨準備高は、1,152億ドルと、9か月ぶりに前月比増加に転じた。

しかしながら、9日発表のインドネシア7～9月期経常収支が、▲88億ドルの赤字と、前回比赤字幅を拡大すると、ドルルピアは上昇に転じ、13日には、一時14930近辺まで上昇した。

15日、発表された10月貿易収支は、▲18億ドルと市場予想より赤字幅が拡大したが、同日開催されたインドネシア中央銀行定例会合にて、予想外の利上げが決定されると、海外投資家の資金流入が再加速し、26日には、再び14450近辺まで下落した。

この間、海外投資家のインドネシア国債保有残高は、過去最高となる889兆ルピアに達している(11月21日現在)

2018年11月26日現在、14470での取引となっている(終値ベース)。

■ 今月の見通し

今月のドルルピアは、原油価格下落・米中関係の緊張緩和を背景とした海外投資家の新規証券投資が期待されるが、ややルピア買いに過熱感もあり、クリスマス休暇前の海外投資家のポジション調整も予想されることから、一進一退の値動き後、年末にかけて、ドルルピアはやや上昇する展開を予想する。

原油価格の下落は、石油関連製品の純輸入国であるインドネシアにとって、ポジティブな材料。しかしながら、インドネシアの輸出品の価格も好調とは言えず、インドネシアの根本的問題である経常収支赤字の急激な改善は見込めない状況。

また、インドネシア10年国債利回りは、10月中旬に9%近くまで上昇したのち、11月に入ってから海外投資家の旺盛な投資需要により、8%割れまで利回りは下落している。この金利低下は急激かつ行き過ぎ感もあることから、海外投資家の買いが一服したのち、年末にかけては、クリスマス休暇前の海外投資家のポジション調整により、ドルルピアは反転上昇に転じるか。

また、実需ベース(経常収支面)でのルピア売りドル買いフローの継続、また、四半期毎のヘッジ規制遵守のためのルピア売りフローも加わり、年末にかけてドルルピアは、15000近辺まで上昇する、と予想する。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の国民的アイドル』

国民的かどうかは定かではないですが、日本人に馴染みのあるインドネシアのアイドルといえば、「JKT48」が挙げられます。秋元康氏の総合プロデュースにより、2011年に日本国外で最初に結成されたAKBグループです。

私も劇場に行ったことはないのですが、日本のAKB48グループの楽曲をインドネシア語に翻訳したものが歌われるそうで、なかなかの盛り上がりと聞いています。

うそかまことか、総合プロデューサーの秋元康は、当初シンガポールに下見に行ったのですが、候補生を見つけられなかったとか、、、。

また、アイドル枠から少し外れますが、インドネシアでは、五輪真弓さん、特に「心の友」が第2の国歌と言われるほど、人気です。

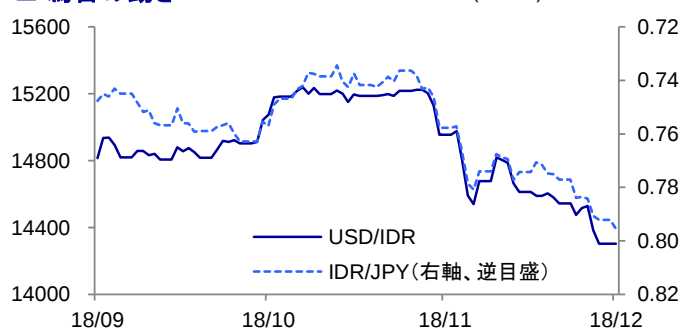
1980年代、インドネシアのラジオ関係者が、彼女のコンサートで同曲を聞き、感銘を受け、インドネシアで流したのがそのきっかけとされています。

様々な場所で流れていて、ジャカルタの名物ゴルフコースのレストランでもBGMとして使われています。「愛はいつも、ラブラバーイ♪」というやつです。

皆さまもどこかで、耳にするかもしれません。

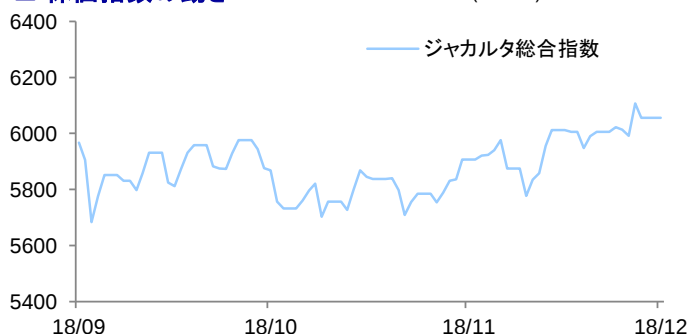
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表E	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	CPI(前年同月比)	10月	3.06%	3.16%	2.88%
11/5	GDP(前年比)	3Q	5.15%	5.17%	5.27%
11/7	外貨準備高(USD B)	10月	-	115.2	114.9
11/9	経常収支(USD M)	3Q	-9.0	-8.8	-8.0
11/15	輸出(前年比)	10月	1.10%	3.59%	2.36%
11/15	貿易収支(USD M)	10月	-0.3	-1.8	-0.2
11/15	BI 7daysリバースレポ金利		5.75%	6.00%	5.75%

フィリピンペソ相場

予想レンジ: USD/PHP 52.00 ~ 54.00
PHP/JPY 2.10 ~ 2.18

アジア・オセアニア資金部 マニラ室 樋上 陽一

■ 先月の為替相場

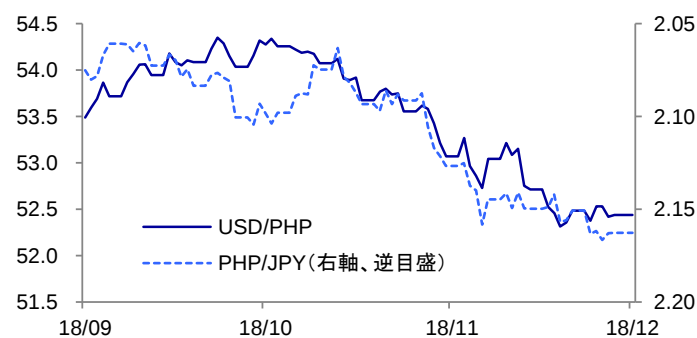
1、2日のフィリピン休日を挟んで月初(11月5日)のオンショアのドルペソ為替相場は、連休前にクローズした水準(1米ドル=53.535ペソ)からペソ高が進み、1米ドル=53.27ペソで取引開始。
ペソ高の要因としては、対中貿易摩擦問題の緩和期待や、英国の欧州離脱交渉の進展を示唆する報道、2日に発表された米10月雇用統計が市場予想を上回る強い内容となったことで、市場センチメントが改善したため。6日の比10月の消費者物価指数は前年同月比6.7%の上昇と前月から横ばい。前月比(季節調整後)では0.3%上昇で、前月の同0.8%から低下。インフレ懸念の後退からペソは対ドルで上昇。
7日には米中間選挙の開票状況を睨みながらの値動きだったが、上院は共和党、下院は民主党が過半数を獲得する結果がみえてくると、大方の予想通りだったことから市場の不透明感が払拭され為替市場はドル売りに。ドルペソ為替相場は10月中旬から続くペソ買いトレンドの流れで節目の1米ドル=53ペソを割り込み、8日には年末のポジション調整(ペソ買戻し)に加え、大口の実需のペソ買い観測もあり、一時5か月ぶりのペソ高水準である1米ドル=52.485ペソで取引される場面も。
しかしながら9日にはFOMCを受けてのドル買いで、1米ドル=52.96ペソまで戻して越週、週明け12日には1米ドル=53ペソ台を回復、その後、フィリピン中銀金融政策委員会(16日)での利上げ観測が高まり、再び1米ドル=53ペソを割り込んだ。
フィリピン中銀は0.25%ポイントの利上げを実施、インフレ見通しを下方修正。これでインフレ懸念の後退が意識され、ペソ買いが優勢に。22日には6か月ぶりのペソ高水準となる1米ドル=52.20ペソで一時取引された。
月末にかけては米中首脳会談を前に貿易戦争リスクが高まり、ややドルが買い戻され1米ドル=52ペソ中盤での取引に。
(28日17時現在)

■ 今月の見通し

左記の通り、先月のフィリピン中銀金融政策委員会では、代表的な政策金利である翌日物借入金利が4.75%に引き上げられた。利上げは5月から5会合連続で、政策金利は9年半ぶりの水準に。
会見では必要に応じて追加利上げの可能性を示すタカ派トーン。一方、2019年のインフレ見通しが4.3%から3.5%に引き下げられ、直近では原油価格の下落もありインフレリスクの後退が意識されている。
フィリピン株式指数は先月13日に年初来安値を更新、軟調推移していたが、フィリピン中銀の利上げにも関わらず節目の7000ポイントを回復。年初からのペソ安と株安で外国人投資家が、フィリピン株式市場への投資妙味が高まっている、と判断すればフィリピン買いにつながる可能性を残す。時期的に新年のニューマネーも期待できよう。
米中の貿易戦争などグローバルなリスクオフ材料も新鮮味が薄れているのは確か。今後、新しいリスクオフ材料がでてくるか、またこれまでの材料が蒸し返されるかに注目したい。
年末のポジション調整については、昨年もこの時期にペソ高が進んだが、値動きを照らし合わせると水準的には1米ドル=52.50ペソ程度までのペソ高を個人的には目安としていた。現在の水準から考えると調整終了ともいえるが、米金利の先高観にやや不透明感が台頭していることから更なるドルの下押し(1米ドル=52ペソ割れ)も考えておくべきか。
ペソ高材料が並ぶ。しかしながら、ペソ高トレンドを期待するのは禁物とのスタンスは継続。
比第3四半期GDP成長率は前年同期比6.1%で前期の6.2%から低下。比9月貿易収支とOFW送金のネット金額は▲16.9億ドルとなり、前月の▲10.4億ドルからマイナス額が大きく拡大している。収支面をみればペソ売りが上回る状況には変わらない。ネガティブな材料が市場には織り込まれ、ドルの底固さを確認する月となるのでは。
(同左)

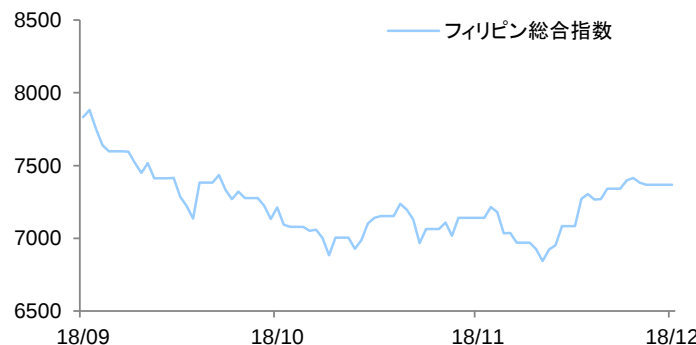
■ 為替の動き

(資料) ブルームバーク



■ 株価指数の動き

(資料) ブルームバーク



■ 先月の注目イベント

発表日 イベント
上記参照

(資料) ブルームバーク

期間	予想	結果	前回

インドルピー相場

予想レンジ: USD/INR 68.00 ~ 73.50
INR/JPY 1.55 ~ 1.65

アジア・オセアニア資金部 インド室 田川 順也

■ 先月の為替相場

【11月の米ドル/インドルピーは下落した】

73.89で当月取引をスタート、高寄りとなりこれが当月の天井に。10月月初につけたWTI76ドル半ば(ブレントでは86ドル)で頭打ちを見せていた原油価格が今月に入っても下げ止まらずインド金融市場はルピー高・印株式上昇で反応。2日には72.50までドル/ルピーは下落。

12日には事前予想を下回る上昇率となった印10月消費者物価指数に印金利市場は低下の反応を見せるも、為替市場はこれを特段材料視せず、原油下落についていく展開。13日、20日と油価が大きく下落すると、ドル/ルピーもそれぞれ72.00、71.00と節目を難なくブレイク。当月安値となる70.31レベルまで一段安となる。

その後は米中の通商交渉に進展が見えたかのようなヘッドラインがあったことや月末にかけて原油が一段と下げると一時70台前半まで下落。

この間センセックスも原油安・ルピー高・印金利低下を好感し、10月の大幅下落を取り戻す流れ。リスクセンチメントの改善もあり、ドル/ルピーは28日執筆時点において70.60近辺で取引されている。

【11月のインドルピー/円は上昇した】

1.527レベルで月初オープンを迎えたルピー/円は同日につけた1.524が当月の安値となる。上述のようにドル/ルピーがルピー高に振れているところにドル/円も米中間選挙をこなし、また良好な米経済指標に114円台まで円安となると月半ばにルピー/円は1.58を回復。月後半は米FRB高官から世界経済を懸念しているとの発言やAPECにて首脳宣言の採択断念、米株の調整等のリスク材料が並びドル/円は112円台まで切り返すも、ドル/円の円高進行に比べ、ドル/ルピーのルピー高進行の割合が強く、ルピー/円は一段高の展開。執筆時点28日において当月高値となる1.61を示現している。

■ 今月の見通し

【12月のドル/ルピーは上値の重い展開を予想】

4月後半以降に米金利が上昇する局面においてアジア圏全体から資金が流出し、いずれのアジア通貨においても対米ドルで減価する展開だった。ただし、売られ方にコントラストがついており、最も下落した通貨はインドルピーである。アジア通貨インデックスが年初来～10月末までで6%の下落だったことに対し、ドル/ルピーは同期間で10%超の下落となった。この間、インドの国債利回りは10年物で2014年以来、2年物で2015年以来となる水準までそれぞれ上昇し、4～6月期GDPは前年比+8.2%という高成長を記録しているにも関わらず、だ。

ルピー売りのテーマは複数あるが、1つに経常収支赤字があった。アジア通貨売りがテーマになる中で、経常収支赤字国であるインドは外国人投資家にとって“売り易い国”となっていた。実際、インドにおける非居住者の投資フローを見ると、4～10月の合算で155億米ドルのネット売りとなっている。

インドは世界第三位の原油輸入国であり、国内需要の85%超を輸入に頼っている。原油価格の上昇は貿易収支赤字を通して、経常収支を悪化されることから、原油価格とドル/ルピーには逆相関が見られた(油価上昇=ルピー下落)。その原油価格上昇が10月から調整し始め、11月には一段と下落し、高値から35%弱安くなった計算となる。背景としては減産監視委員会が方針転換をすると表明をしていることや、トランプ大統領の原油安誘導発言、米中貿易交渉に伴った需要減などが挙げられる。目先はOPEC総会、G20にてどのような議論がなされるかが焦点で、ドル/ルピーも原油価格に振らされ、ボラタイルな展開を想定しているが、原油価格が30%超下がった現水準ではドル/ルピーも上値の重さが意識されるだろう。

■ 今月のつぶやき(現地からの声)

『当地の国民的アイドル』

2006年のことだ。バンガロール市内が「非常事態」となった。カンナダ映画のスーパースター、ラジマル氏が76歳で急逝したという一報を受け、商店や企業が次々にシャッターを下ろしたのだ。

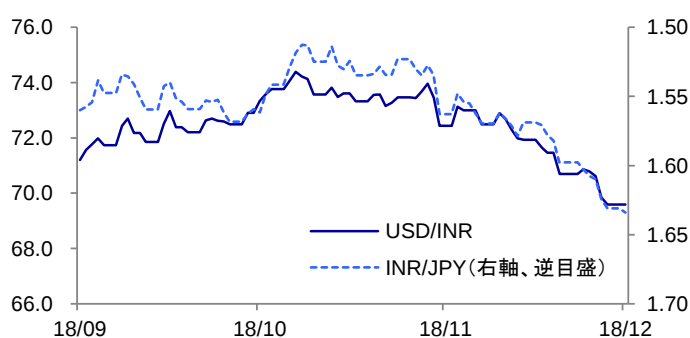
追悼の意を表して代表的な映画スタジオへ向かった人々の数は数百万人とされるが、一部が暴徒化したことから市内はゼネスト状態になり、外資系など大企業も急遽、休業を決めたほどであった。

すでに12年も昔の話であるが、偶然バンガロールに居合わせた筆者にとっては大きなカルチャーショックであった。

気になるのは、タミル映画をはじめ南インドの大ヒーロー・ラジニカント氏の健康状態だ。「ムトゥ・踊るマハラジャ」の邦題で1998年にヒットした映画で主役を務めたので、日本でも知名度が高い。現在67歳。体調不良でシンガポールにて入院した等のニュースも耳にした。同僚によると、「ラジニカントが亡くなったら確かに大ごとだけど、彼はチェンナイ在住だしタミル映画の代表だ。バンガロールでは、ラジマル氏ほどのインパクトは無いと思う」とのこと。ラジマル氏を超えるスーパースターはカンナダ映画界にはまだ出現していないそうである。(バンガロール支店 木原志乃)

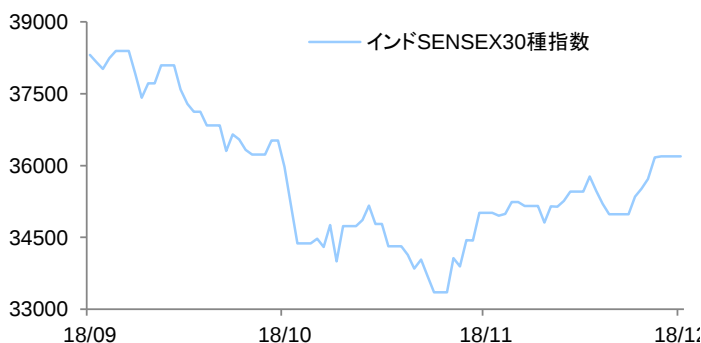
■ 為替の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 株価指数の動き

(資料)ブルームバーグ



■ 先月の注目イベント

発表日	イベント	期間	予想	結果	前回
11/1	製造業PMI	10月	-	53.1	52.2
11/12	鉱工業生産	9月	4.30%	4.50%	4.70%
11/12	CPI	10月	3.60%	3.31%	3.70%
11/15	貿易収支	10月	-173億ドル	-140億ドル	-174億ドル

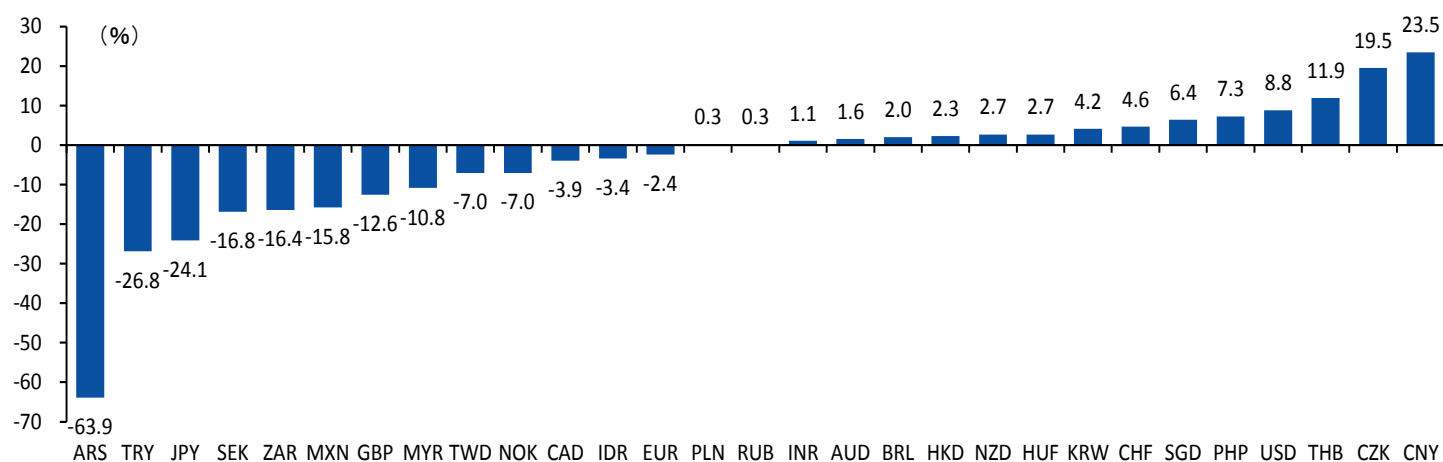
(資料)ブルームバーグ

■ 為替市場・株式市場騰落率

	為替市場	2017年末	2018年11月末	騰落率	株式市場	2017年末	2018年11月末	騰落率	USD換算
先進国									
米国	-	-	-	-	NYダウ平均	24719.22	25538.46	3.3%	-
日本	USD/JPY	112.69	113.57	0.8%	日経平均株価	22764.94	22351.06	-1.8%	-2.6%
ユーロ圏	EUR/USD	1.2005	1.1317	-5.7%	ドイツDAX指数	12917.64	11257.24	-12.9%	-12.9%
英国	GBP/USD	1.3513	1.2749	-5.7%	ロンドンFTSE100指数	7687.77	6980.24	-9.2%	-3.8%
豪州	AUD/USD	0.7809	0.7306	-6.4%	S&P/ASX200指数	6065.129	5667.157	-6.6%	-0.1%
カナダ	USD/CAD	1.2571	1.3292	5.7%	S&PTロント総合指数	16209.13	15197.82	-6.2%	-11.3%
エマージングアジア									
中国	USD/CNY	6.5068	6.9605	7.0%	上海総合	3307.172	2588.188	-21.7%	-26.8%
香港	USD/HKD	7.814	7.824	0.1%	香港ハンセン	29919.15	26506.75	-11.4%	-11.5%
インド	USD/INR	63.8725	69.5837	8.9%	インドSENSEX30種	34056.83	36194.3	6.3%	-2.4%
インドネシア	USD/IDR	13555	14302	5.5%	ジャカルタ総合	6355.654	6056.124	-4.7%	-9.7%
韓国	USD/KRW	1067.4	1120.75	5.0%	韓国総合株価	2467.49	2096.86	-15.0%	-19.1%
マレーシア	USD/MYR	4.0465	4.1842	3.4%	ブルサマレーシアKLCI	1796.81	1679.86	-6.5%	-9.6%
フィリピン	USD/PHP	49.85	52.436	5.2%	フィリピン総合	8558.42	7367.85	-13.9%	-18.2%
シンガポール	USD/SGD	1.336	1.3724	2.7%	シンガポールST	3402.92	3117.61	-8.4%	-10.8%
台湾	USD/TWD	29.733	30.82	3.7%	台湾加権	10642.86	9888.03	-7.1%	-10.4%
タイ	USD/THB	32.574	32.941	1.1%	タイSET	1753.71	1641.8	-6.4%	-7.4%

(資料)ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 実質実効為替レート(REER)の1994年以降の平均からの乖離(2018年10月時点)



■ 実質GDP成長率

	2017Q1	2017Q2	2017Q3	2017Q4	2018Q1	2018Q2	2018Q3	2016	2017
	(前年比%、*前期比年率%)							(前年比%)	
先進国									
米国*	1.8	3.0	2.8	2.3	2.2	4.2	3.5	1.6	2.2
日本*	2.3	1.9	2.9	0.8	-1.1	3.0	-1.2	0.9	1.8
ユーロ圏	2.1	2.5	2.8	2.7	2.4	2.2	1.7	1.8	2.4
英国	1.8	1.9	1.8	1.4	1.1	1.2	1.5	1.8	1.7
豪州	1.9	1.9	2.7	2.4	3.2	3.4		2.6	2.2
カナダ*	4.0	4.6	1.7	1.7	1.4	2.9	2.0	1.4	3.1
エマージングアジア									
中国	6.9	6.9	6.8	6.8	6.8	6.7	6.5	6.7	6.9
香港	4.4	3.9	3.6	3.4	4.6	3.5	2.9	2.2	3.8
インド	6.1	5.6	6.3	7.0	7.7	8.2	7.1	7.1	0.0
インドネシア	5.0	5.0	5.1	5.2	5.1	5.3	5.2	5.0	5.1
韓国	2.9	2.8	3.8	2.8	2.8	2.8	2.0	2.9	3.1
マレーシア	5.6	5.8	6.2	5.9	5.4	4.5	4.4	4.2	5.9
フィリピン	6.5	6.6	7.2	6.5	6.6	6.2	6.1	6.9	6.7
シンガポール	2.5	2.8	5.5	3.6	4.6	4.1	2.2	2.0	3.6
台湾	2.9	2.5	3.4	3.5	3.2	3.3	2.3	1.4	2.9
タイ	3.4	3.9	4.3	4.0	4.9	4.6	3.3	3.3	3.9

(注) インドの年間成長率は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 失業率

	18/03	18/04	18/05	18/06	18/07	18/08	18/09	18/10	2016	2017
	(%)								(%)	
先進国										
米国	4.1	3.9	3.8	4.0	3.9	3.9	3.7	3.7	4.9	4.4
日本	2.5	2.5	2.2	2.4	2.5	2.4	2.3	2.4	3.1	2.8
ユーロ圏	8.5	8.4	8.2	8.2	8.1	8.1	8.1	8.1	10.0	9.1
英国	4.2	4.2	4.2	4.0	4.0	4.0			4.9	4.5
豪州	5.5	5.6	5.4	5.3	5.3	5.3	5.0	5.0	5.7	5.6
カナダ	5.8	5.8	5.8	6.0	5.8	6.0	5.9	5.8	7.0	6.3
エマージングアジア										
中国	3.9			3.8			3.8		4.0	3.9
香港	2.9	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	3.4	3.2
インドネシア						5.3			5.6	5.4
韓国	4.0	3.8	4.0	3.7	3.8	4.2	4.0	3.9	3.7	3.7
マレーシア	3.3	3.3	3.3	3.4	3.4	3.4	3.3		3.5	3.4
フィリピン		5.5			5.4				5.5	5.7
シンガポール	2.0			2			2.1		2.1	2.2
台湾	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.7	3.9	3.8
タイ	1.2	1.1	1.0	1.1	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.2

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 消費者物価上昇率

	18/04	18/05	18/06	18/07	18/08	18/09	18/10	18/11	2016	2017
	(前年比%)								(前年比%)	
先進国										
米国	2.5	2.8	2.9	2.9	2.7	2.3	2.5		1.3	2.1
日本	0.6	0.7	0.7	0.9	1.3	1.2	1.4		-0.1	0.5
ユーロ圏	1.3	1.9	2.0	2.1	2.0	2.1	2.2	2.0	0.2	1.5
英国	2.4	2.4	2.4	2.5	2.7	2.4	2.4		0.7	2.7
豪州			2.1			1.9			1.3	1.9
カナダ	2.2	2.2	2.5	3.0	2.8	2.2	2.4		1.4	1.6
エマージングアジア										
中国	1.8	1.8	1.9	2.1	2.3	2.5	2.5		2.0	1.6
香港	1.9	2.1	2.4	2.4	2.3	2.7	2.7		2.4	1.5
インド	4.6	4.9	4.9	4.2	3.7	3.7	3.3		5.0	3.3
インドネシア	3.4	3.2	3.1	3.2	3.2	2.9	3.2		3.5	3.8
韓国	1.6	1.5	1.5	1.5	1.4	1.9	2.0		1.0	1.9
マレーシア	1.4	1.8	0.8	0.9	0.2	0.3	0.6		2.1	3.9
フィリピン	4.5	4.6	5.2	5.7	6.4	6.7	6.7		1.8	3.2
シンガポール	0.1	0.4	0.6	0.6	0.7	0.7	0.7		-0.5	0.6
台湾	2.0	1.8	1.4	1.8	1.5	1.7	1.2		1.4	0.6
タイ	1.1	1.5	1.4	1.5	1.6	1.3	1.2		0.2	0.7

(注) 豪州は四半期データ。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 経常収支

	2017Q1	2017Q2	2017Q3	2017Q4	2018Q1	2018Q2	2018Q3	2016	2017
	(対GDP比%)							(対GDP比%)	
先進国									
米国	-2.2	-2.3	-2.3	-2.3	-2.3	-2.2		-2.4	-2.3
日本	3.9	3.8	4.0	4.0	4.0	4.0	3.8	3.8	4.0
ユーロ圏	3.2	2.9	3.1	3.2	3.4	3.5		3.3	3.5
英国	-4.7	-4.5	-3.8	-3.7	-3.7	-3.5		-5.8	-3.9
豪州	-1.6	-2.5	-2.8	-3.6	-2.5	-2.9		-2.9	-2.5
カナダ	-2.9	-2.7	-2.7	-3.0	-3.1	-3.1	-2.8	-3.2	-3.0
エマージングアジア									
中国	1.5	1.4	1.0	1.3	0.9	0.5	0.4	1.8	1.3
香港	3.7	3.9	4.7	4.3	4.1	3.9		3.8	4.3
インド	-0.7	-1.3	-1.4	-1.5	-1.9	-1.9		-0.6	-1.5
インドネシア	-1.5	-1.4	-1.3	-1.7	-2.0	-2.4	-2.8	-1.8	-1.7
韓国	6.3	5.5	5.6	5.1	4.5	4.5		7.0	5.1
マレーシア	2.0	2.6	3.0	3.1	3.7	3.3	2.6	2.1	3.1
フィリピン	-0.4	-0.5	-0.1	-0.8	-0.6	-1.4		0.2	-0.8
シンガポール	19.9	19.3	19.2	18.8	18.7	19.0	18.5	19.0	18.8
台湾	13.1	13.0	13.7	14.3	14.4	14.1	12.7	13.4	14.3
タイ	11.1	10.6	11.0	11.0	10.5	10.0	7.7	8.0	11.7

(注) インドの年間経常収支は会計年度(4～3月)。

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行

■ 世界の政策金利

		現在 (%)	政策転換期		最近の政策変更		直近の政策動向	
			日付	水準 (%)	日付	(単位:bp)	日付	決定事項
先進国								
米国	FFレート誘導目標	2.00- 2.25	引き締め: 2015/12/17	0.25 - 0.50	2018/9/26	+25	2018/11/8	現状維持
日本	無担保コール翌日物金利	0.10	緩和: 2008/10/30	0.50	2010/10/5	0-10	2018/10/31	現状維持
ユーロ圏	主要リファイナンスオペ金利	0.00	緩和: 2011/11/3	1.50	2016/3/10	-5	2018/10/25	現状維持
英国	バンク・レート	0.75	引き締め: 2017/11/2	0.25	2018/8/2	+25	2018/11/1	現状維持
豪州	キャッシュ・レート	1.50	緩和: 2011/11/1	4.75	2015/8/2	-25	2018/11/6	現状維持
カナダ	翌日物金利	1.75	引き締め: 2017/7/12	0.50	2018/10/24	+25	2018/10/24	+25bp
エマージングアジア								
中国	1年物貸出基準金利	4.35	緩和: 2012/6/8	6.31	2015/8/25	-25	2015/10/23	-25bp
インド	翌日物レポ金利	6.50	引き締め: 2018/6/6	6.00	2018/8/1	+25	2018/10/5	現状維持
インドネシア	7日物リバースレポレート	6.00	引き締め: 2018/5/17	4.25	2018/11/15	+25	2018/11/15	+25bp
韓国	7日物レポ金利	1.75	引き締め: 2017/11/30	1.25	2018/11/30	+25	2018/11/30	+25bp
マレーシア	翌日物金利	3.25	引き締め: 2018/1/23	3.00	2018/1/23	+25	2018/11/8	現状維持
フィリピン	翌日物金利	4.75	引き締め: 2018/5/10	3.00	2018/11/15	+25	2018/11/15	+25bp
タイ	翌日物レポ金利	1.50	緩和: 2011/11/30	3.50	2015/3/11	-25	2018/11/14	現状維持
ベトナム	リファイナンス金利	6.25	緩和: 2012/3/12	15.00	2017/7/7	-25	2017/7/7	-25bp

(注) インドネシア中銀は2016年8月19日に政策金利をBIレートから7日物リバースレポレートに変更

(資料) ブルームバーグ、みずほ銀行